

# 2026年度 事業計画

JAAF REFORMの具現と未来へのメッセージ  
2027年3月末の「在りたい姿」に向けて

公益財団法人日本陸上競技連盟

**2025年の興奮＝熱量を日常へ。**

## **JAAF REFORM：構想を具現するPhase2から3へのステージ移行**

**2025年の世界陸上の熱狂を一過性に終わらせない。**

**トップアスリートがさらに躍進してグローバルに輝き続ける環境・仕組みを整える。**

**陸上をそれぞれのスタイルで楽しむ人が増えて、陸上の人々の生活の一部として定着する日常へ。**

### **未来に輝く人材の活躍**

- ・トップアスリートがさらに躍進して、グローバルに輝く環境、仕組みの構築。
- ・競技力だけでなく、社会で広く貢献する人材の輩出を支援する。

### **「陸上」の楽しみ方の多様化と機会の創出**

- ・RIKUJO JAPANの活動や、世界陸上レガシー事業の実施を通じ、競技場を飛び出し、日常空間（街中等）で陸上の魅力を届ける。
- ・競技に関心のなかった層を「陸上を楽しみ愛する仲間」へと誘う。

### **共創による「陸上の価値と共感の輪」の拡大**

- ・単なる支援ではなく、社会課題を共に解決するための共創・協働関係「Social Innovation Family」を構築し、新たなパートナーシップカテゴリーも設計。陸上の社会価値を認め、協働することで、自らの事業のビジョン・ミッション、目的の達成を目指す。

### **DXを通じた「生涯つながる」関係性の深化**

- ・JAAF IDを軸としたデジタルネットワークサービスで、一人ひとりのライフステージからのニーズに合わせた情報提供を実現。
- ・「つなぎ、つなげる」役割を強化。

# 2027年3月末の「在りたい姿」

世界と戦えるトップアスリートの強化と、陸上が日常に根付き生涯楽しめる環境（ウェルネス陸上）の整備を推進。  
デジタル活用で「ささえる」負担を軽減し、インテグリティを重視した組織基盤のもと、持続可能な環境を整備する。

## トップアスリートの強化と応援・体験文化の定着

ロス五輪に向け、アジア大会プレイシングテーブルで1位を獲得。  
日本選手権、GGPの観客数増加、国際レベルのイベントプレゼンテーションによる来場者の満足度向上とリピーターの増加。

## 安全で持続可能な育成・指導体制

「育成年代における競技会ガイドライン」に準じ、育成年代における競技者の健全な成長を促し、安全で公正かつ多様な競技環境を提供する。  
新たなコーチ制度による倫理観と専門性を持つ質の高いコーチの全国的な配置。

## 多様な人が楽しめる環境の創出・拠点の整備

RIKUJO JAPANの主催・連携事業の全国への拡がりをもとに、陸上の楽しさに触れる場を創出。  
JAAF認定トレーニングセンターの本格稼働。競技会基盤改革会議で、地域の実情を鑑み、地域の課題に寄り添える基準の再設計に着手する。

## 「ささえる」人材とデジタル運営の進化

JAAF IDによる生涯記録蓄積、エントリーシステムの全国標準化による競技会運営の利便性の向上、ボランティアバンク構築。

## 強固な組織基盤とJAAFIDをベースとしたコミュニケーションの充実

制定した指針、ポリシーをベースとしたD&I推進とインテグリティ教育の標準化。  
JAAFIDに基づくコミュニケーションの進化。

# 事業展開の全体像 「ダイヤモンド」事業循環モデル

「競技力」が生む熱量を「価値」に変換し、次なる「未来」へ再投資する循環構造の確立。

## 国際戦略（感動体験の創出）

トップアスリートの活躍（ロス五輪・アジア大会）が  
陸上日本代表のブランドを高め、圧倒的な「熱量」を生み出す。

### 社会価値・収益への変換

#### (RIKUJO JAPAN)

生み出された熱量を「身近な体験」  
へ転換。持続可能な収益源の多角化。



### 社会価値・収益への変換

#### (デジタル基盤)

生み出された熱量を「データ（JAAFID/  
ファンクラブ）」へ転換。  
持続可能な収益源の多角化。

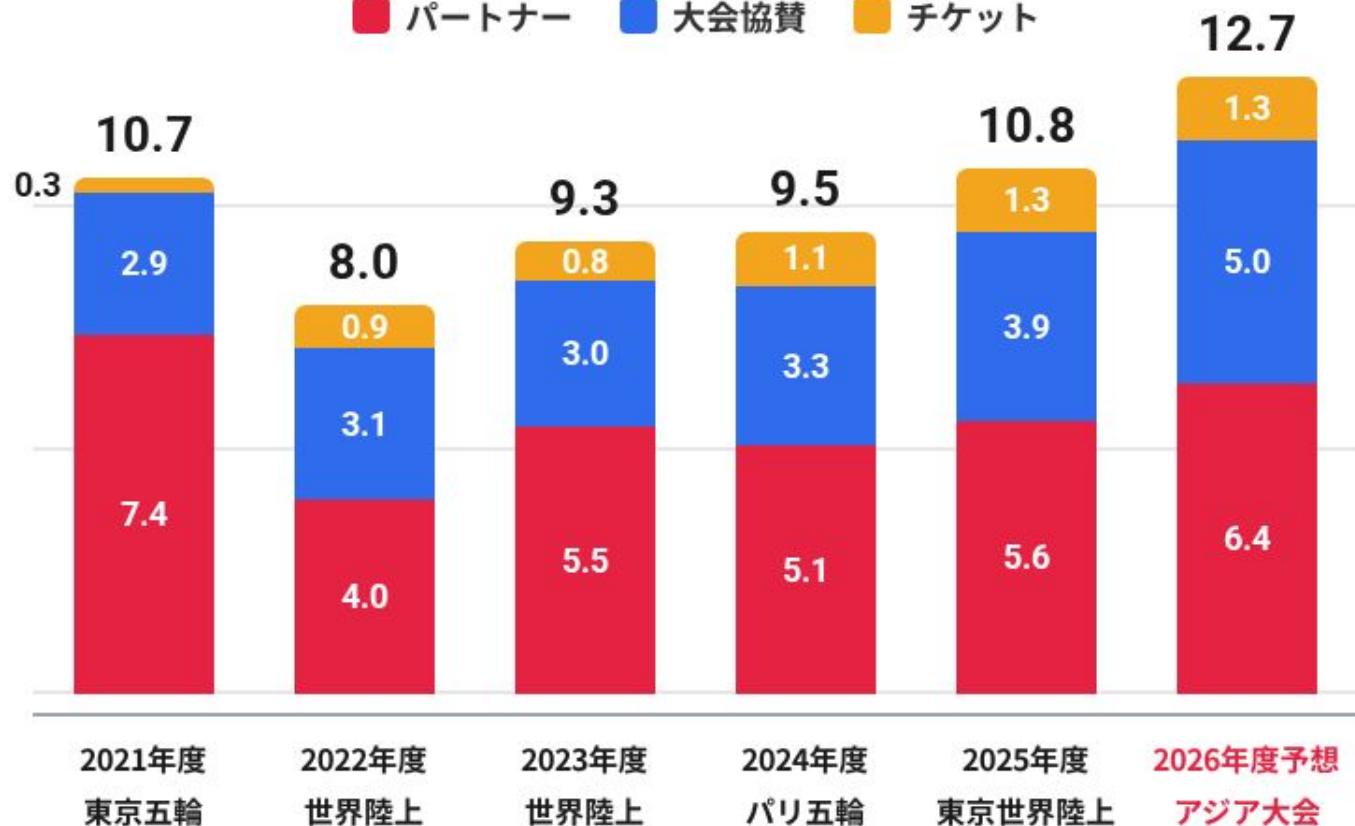
## 未来への戦略的再投資（キャパシティビルディング・地域基盤）

次世代アスリート育成、指導者・審判員養成、安心・安全な環境構築へ還元。  
こうした基盤の充実が、中長期的にトップアスリートの活躍を支える。

# 事業収益の拡大を未来への戦略投資へ。持続的な成長の好循環を確立。

## 収益構成と推移 (単位: 億円)

■ パートナー ■ 大会協賛 ■ チケット



コロナによる影響

マーケティング体制再構築

## 増益分を未来の基盤へ戦略的投資

### 1. トップアスリートの国際競技力強化

U23強化プロジェクト、三位一体プロジェクトによる国際競争力向上支援。  
国際大会でのメダル獲得・入賞を狙うトップアスリート育成支援。

### 2. 未来を担う人材のキャパシティビルディング

地域スポーツを支える指導者・審判員などの担い手が力を発揮できる環境を整備する。

### 3. 「陸上」に関わるすべての人のための環境整備

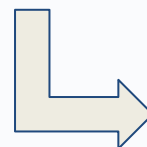
JAAFID・デジタル基盤・RIKUJO ファンクラブの充実

### 4. 持続可能な陸上界の基盤強化

リスク管理とガバナンス: 安心・安全な環境を守るためのセーフガーディング体制の構築。

### 5. 共創の機会と場づくり

RIKUJO JAPAN等のプロジェクトを通じ、新たなフィールドを切り拓くための先行投資。



**在りたい姿を実現**

# 事業計画の柱①:国際競技力向上、キャパシティビルディング

世界で勝つ競技力と、社会で活躍する人間力の両輪で、社会を照らすリーダーが輝く場を整備する。

## 🏆アスリートの強化・未来の活躍推進

勝つ力の最大化:

**三位一体プロジェクト:**「強化・医事・科学」の連動による科学的サポート体制の確立。

**海外派遣によるU23強化:**シニア移行期の「空白期間」に対し、JSCの支援プログラムの採択をうけ投資強化。「海外で勝つ」ための遠征・合宿を促進。

**キャリア自立支援:**「ダイヤモンドアスリート」や「ライフスキルトレーニング」を通じ、競技力向上だけでなく、社会に貢献し続ける豊かなキャリアの形成を支援。

**国際戦略:**WA等でのポスト獲得活動強化。国際的なルールメイキングを日本が牽引。

## 👥ささえる人材との共創・共育

人間力とリーダーシップ:

**高い倫理観と専門性をもつ指導者の育成:**地域展開や育成年代の課題に対応するため、指導者資格の更新条件としてインテグリティ教育の受講を義務化し、質の高い指導者を育成。

**次世代の陸上界を変革するリーダーの育成:**ダイヤモンドアスリート・ライフスキルトレーニングを通じ、競技力と人間力を兼ね備えたキャパシティビルディングを継続推進。

引退後のトップアスリートを対象としたハイパフォーマンスリーダーズを展開し、陸上界と社会を牽引する次世代リーダーのキャリア形成を支援。

**審判員制度改革とボランティアの参画:**WA資格との整理を行い、公認審判員の新たな制度を策定。

ボランティアとの役割分担で人手不足・高齢化に対応し、効率的で持続可能な運営体制の編成。

# 事業計画の柱②:機会と場の提供

「する・みる・支える・つなげる」機会を広げ、誰もが関わりやすい環境を整えることで、陸上の社会価値を最大化し、日常に根付く文化へ。

## トップ・国際大会の競技会価値向上



日本選手権、GGPで来場者数（特にリピーター）の増加を目指し、エンターテインメント性を高めた「魅せる競技会」を推進。2028年ロス五輪に向け、日本選手権、GGP、MGCなど継続的なストーリー構築。2032年ブリスベン五輪を見据え、国際大会の計画的誘致を進める。

一方で、GPシリーズは、シリーズ全体としてではなく、各大会が特色を出し、トップアスリートが終結する場としての再設計を2028年までに行う。

## 多様な「場」の公認化と拠点整備



公認競技場減少への対応。環境プロジェクトの調査により判明した課題の解決を目指し、安全性・正確性を担保した上で地域ニーズに応じた基準の導入を競技会基盤改革会議で検討し具体案を作成。

JAAF認定トレーニングセンターの拡充。

## 育成年代の持続可能な競技環境の整備



『育成年代における競技会ガイドライン』を基軸に、競技会体系を再設計。

WBGT31度基準の運用を含め競技会の開催時期・運営方法そのものの見直し。

競技者・指導者・大会運営の過度な負担を抑えた持続可能な運営を実現。

## 「陸上の入り口」の拡大



RIKUJO JAPANの象徴的なイベントとして「SPEED STAR」を主催、またライセンス契約団体と連携し街中展開を加速。

RIKUJO JAPAN事業の連携イベントを年間30以上へ拡大と、世界陸上レガシー事業との連携を通じ、陸上に触れる機会と場を増やす。

JAAF IDによる連携も視野に入れながら、アスレチックファミリーの拡大を目指す。

## 事業計画の柱③:情報発信・コミュニケーション

デジタル基盤と100周年のレガシーを融合し、アスレチックファミリーと生涯繋がり続ける仕組みを構築する。

「する、みる、支える、つなげる」JAAF IDを軸としたプラットフォームを構築する。

### システムを用いたコミュニケーション戦略

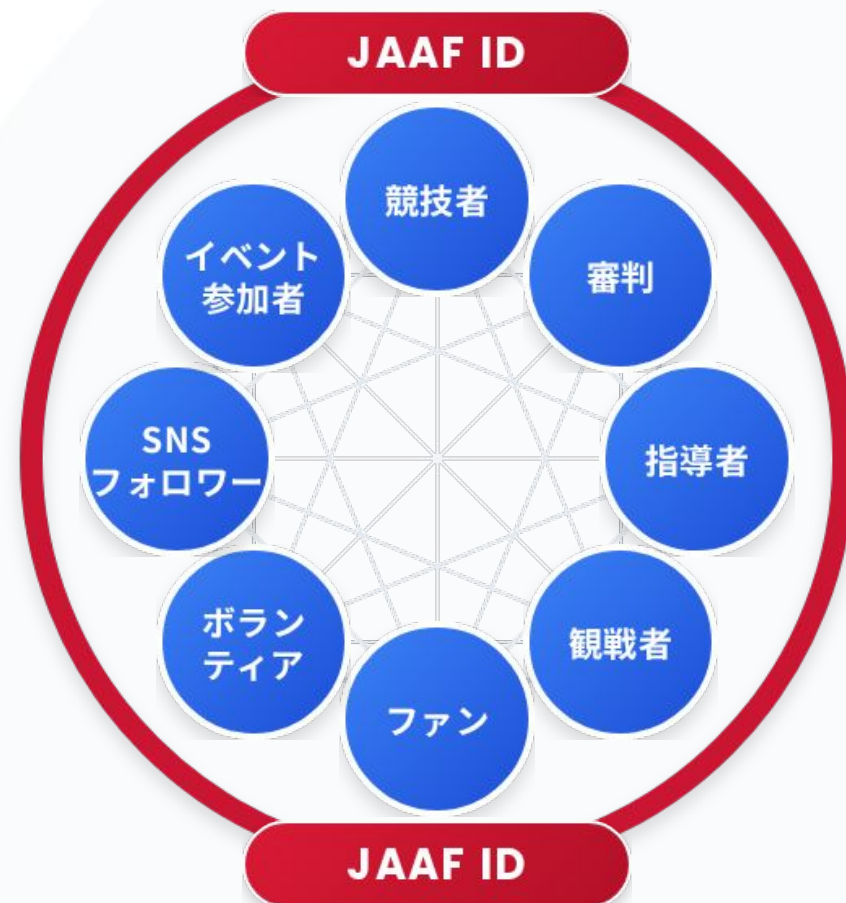
- ・育成世代からの記録を蓄積するマイページによる「生涯記録サービス」の提供。
- ・エントリーシステムの全47都道府県標準化による業務省力化。

### ファミリーの拡大とデータ活用

- ・「競技者・ファン・ボランティア」等、各属性の規模をKPI化し毎年評価。
- ・他団体とのデータベース連携により、未開拓層との新たな接点を創出。

### データに基づくプッシュ型広報

- ・ユーザーの興味・ニーズに合わせた最適な情報配信。
- ・日本陸連公式SNSやホームページ、ファンサイトの改修を通じたエンゲージメント向上。



# 事業計画の柱④:信頼されるサステナブルな組織基盤強化

ガバナンスとコンプライアンスを徹底し、社会から信頼される「サステナブルな陸上界」へ。

制度疲労を抜本的に見直し、次世代が安心して活動できる環境を整備する。

## 信頼と多様性を支えるガバナンス強化

スポーツ団体ガバナンスコードに基づき女性理事50%・外部理事25%を達成。評議員においても同様の達成目標を設定。理事会等の定数見直しや加盟団体連絡協議会の機能再定義を進め、地域の声を反映する仕組みを整備する。都道府県陸協、協力団体やパラ陸上、トレイルランニング等と連携し、インテグリティを基盤とした信頼される組織体制を確立する。

現役アスリート委員長を理事に登用し、アスリートの意見を組織の方針決定や声明発信にダイレクトに反映させる。

## セーフガーディングと相談体制の強化

人権ポリシーとインテグリティ行動指針をベースに、ハラスメントや差別を許さない組織文化の定着を推進。相談窓口の機能整備や外部連携を進め、低年齢層はじめ、指導者や全ての陸連登録者を守る安全な競技環境を整備するとともに、指導者への倫理教育を強化する。

## 社会価値創出によるマーケティング改革

外部専門人材に登用し事業戦略を強化。RIKUJO JAPANを軸に企業の社会課題解決と陸上の価値を結びつけた「Social Innovation Family」を創設。今後、SDGs等の社会課題をテーマとした新たなパートナーシップを拡大し、持続的な資金循環を生み出す。

## 安全で持続可能な競技運営への転換

育成年代競技会ガイドラインの運用を徹底し、早期専門化の回避や健全な成長を重視した競技環境へ転換。審判員編成の適正化や大会運営の見直しを進めるとともに、WBGT基準の厳格運用や2シーズン制の検討など酷暑環境を回避した安全な競技体制を整備する。

# 事業計画の柱を支える共通戦略：国際戦略の推進

## 日本陸上界の発展、世界・アジア陸上界への貢献、アスリートの活躍に繋がる国際戦略の推進

### 国際戦略の策定と推進

国際競技団体の任期サイクルに整合した短中期（～2027年）、中長期（～2031年）の戦略を策定し、重点領域を明確化した上で計画的に実行。アスリートの競技力向上に資する国際基準、ルールの正確な把握と浸透を徹底。国際協力機関との連携。東京2025世界陸上のレガシーの活用。

### ポスト獲得

2027年WA・AA・EAAA選挙に向けて、戦略的な候補者選定と支援を構築し、持続的な国際ポスト獲得。

WAでは既存のカウンシルメンバー、ガバナンス委員、コンペティション委員の継続的な活動を基盤としつつ、アスリート委員、コーチ委員での新規ポスト獲得を視野に入れ、日本からの国際的リーダーの育成、輩出を強化。

### 戦略的な国際競技会招致

日本陸上界の発展、世界・アジア陸上界への貢献、アスリートの活躍に繋がる要素を総合的に検討し、戦略的な国際競技会の誘致方針を決定。アジア、東アジア管轄のハーフマラソン、競歩、クロスカントリーを優先的な誘致対象とする事を視野に、将来的にはアジア選手権、室内大会、世界競歩チーム選手権等、より高位の大会招致計画の作成。

### キャパシティビルディング（人材育成）

WA・AA・EAAAにおける日本人役員、委員がその能力を十分に発揮できる環境を整備と支援体制を強化。これらの活動で得られる知見や国際ネットワークを体系化し、若手、次世代人材へ継承する仕組みを構築。

指導者、審判、スタッフが国際基準を理解し経験をつめる場を国内外の関係機関と連携して拡充。

# 事業計画の柱を支える共通戦略：次の100年を創るレガシー記念事業

「記憶を記録に、そして未来への創造」。

100周年を単なる節目で終わらせず、次の100年を支える「新しい陸上の基盤」を創り出す。

## 過去と未来をつなぐバーチャルミュージアム

創立100周年を記念し、国立競技場で開催された「RIKUJO フェスティバル」とあわせて、100年の歴史をデータ化した更新型アーカイブ（バーチャルミュージアム）を開館。研究成果の集積と若い世代との接点となる知の拠点として活用。継続的に蓄積・更新し続ける“進化する知の基盤を目指す”。

## 陸上の枠を超えるリーダーの活躍推進

ダイヤモンドアスリートやライフスキルトレーニングを通じ、競技力と人間力を兼ね備えたキャパシティビルディングを推進。さらに引退後のトップアスリートを対象としたハイパフォーマンスリーダーズを展開し、陸上界と社会を牽引する次世代リーダーのキャリア形成を支援する。

## 社会とつながる新しい「場」 RIKUJO JAPAN

SPEED STAR等のイベントを通じ、競技場の外で誰もが陸上に触れる機会を創出。企業・自治体・他競技団体と連携し、社会課題解決と陸上の価値を結びつける「Social Innovation Family」を拡大し、陸上の社会的価値を高める。

## インテグリティとD&Iの推進

JAAF人権ポリシーとインテグリティ行動指針をベースに、自発的な行動変容を促す文化を醸成。組織の活性化を高めるセーフガーディングの徹底を進め、多様な人材が安心して活動できる環境を整え、社会から信頼される持続可能な組織基盤の確立を目指す。

# 事業計画の柱を支える共通戦略：アスリートの環境整備と権利保護

「公平性」と「尊厳」を守り抜く。アスリートが安心して挑戦でき、その価値が正当に評価される環境へ。

## 権利保護と安全対策：誹謗中傷・迷惑撮影の排除

JOCと連携したSNSモニタリングと即時削除申請（世界陸上で230件対応）など、競技者を守るアクションを実践。肖像権の厳格な管理体制を強化。会場での撮影ルール巡回強化や法的措置を含む断固たる対応で、迷惑撮影（盗撮）や誹謗中傷を排除し、競技者の精神的安全を確保。

## 人権の保護とD&Iの推進（競技者の尊厳とセーフガーディング）

WA新規則（女子カテゴリー参加資格）に対しては、競技者のプライバシーと尊厳を最優先に保護し、完全な秘匿性のもと専門医やカウンセリング等によるサポート体制を構築する。あわせて、人権ポリシーを基盤としたハラスメントや暴力行為の根絶、相談窓口の守秘義務・機能強化を図り、誰もが安心して参加できるインクルーシブな陸上界を実現する。

## スポーツ・インテグリティの確保（クリーンなスポーツ環境の維持）

JADA提供コンテンツや認定エデュケーター制度の導入を通じ、育成年代から指導者までアンチ・ドーピング教育を徹底する。また、中高生を中心とした不適切な鉄剤注射の撲滅に向けた検査・啓発活動を継続推進し、競技者の健康を守るとともに、クリーンで公正なスポーツ環境を維持する。

## アスリートセンターの組織運営

現役アスリート委員長の理事登用により、アスリート視点での意見を組織方針の決定や声明発信にダイレクトに反映させる。この仕組みを軸に、アスリート視点の課題を日本陸連の意思決定に直接組み込むガバナンス体制をさらに強化。

# 事業計画の柱を支える共通戦略：サステナブルな社会への貢献 - SDGs 2026

陸上の価値を社会課題解決と結びつけ、持続可能な陸上界と社会を共創する。

## 環境

目標 12

主催大会での「3Rのバトンプロジェクト」展開。U20日本選手権では静岡陸協の協力のもとフードロス対策として大会役員、審判の弁当を廃止し、食事代を補助。NPO団体との連携を通じ、子ども食堂への日本代表派遣時の調理機材を寄贈。

## ジェンダー・人権

目標 5

目標 10

女性理事比率50%達成。「JAAF人権ポリシー」制定と、Well-being事業を通じた女性特有の健康課題への啓発活動を実施。

## 安心・安全

目標 3

目標 16

WBGT31度基準の厳格運用。インテグリティ（誠実さ）教育の標準化とセーフガーディング体制の構築。暴力・ハラスメント相談窓口の機能強化

## 共創型パートナーシップの推進

目標 17

企業のSDGs戦略と陸上の価値を掛け合わせた「共創型パートナーシップ」の本格拡大。NPO団体との連携を通じた活動推進。

## 競技会カレンダー改革

目標 3

目標 13

酷暑回避を原則とした「2シーズン制」の導入検討と、命を守る安全な競技環境の標準化

## 次世代を担うリーダーの育成

目標 4

競技力だけでなく「人間力」を備え、社会課題の解決に貢献できるリーダーを陸上界から輩出

## ウェルネス陸上の全国展開

目標 3

目標 11

街中イベント「SPEED STAR」をはじめとしたRIKUJO JAPANの活動や地域認定拠点において、誰もがスポーツを楽しめるまちづくりに貢献

# 東京2025世界陸上レガシー事業

東京2025世界陸上の熱量を財産とし、「陸上の普及振興」「キャパシティビルディング」を柱とした事業を実施  
大会のレガシーを確実に日本陸上の次のステージへ根付かせるため、2026年度から2028年度の3年間で集中的に推進

## 🔍 世界陸上を契機とした取り組みの加速

### 「陸上」体験の場の創出

誰もが経験したことがある運動会の「かけっこ」や「リレー」のように、競争の中で頑張りを、楽しむ感覚を思い出したことが、世界陸上の熱狂を生み出した。  
陸上の体験の場と機会の創出を加速させる。

### 国際基準の「魅せる」大会

スピーディーで密な競技進行になど観客を飽きさせない工夫により観戦体験に大きなインパクトを残した。  
世界陸上での経験を機に、国際ルールの理解と柔軟な対応力に「エンターテインメント性」が加わり、陸上をいっそう「見に行きたくなるスポーツ」へと押し上げる。

### 🎯 目指す姿

- ✓ 陸上を観る・体験できる場と機会が全国で創出される。
- ✓ 日本選手権、GGPなどで「魅せる競技会」が定着し、国際基準の運営力向上と陸上の魅力がGPシリーズなどで全国に広がる。
- ✓ 陸上の「する」「みる」「支える」「つながる」が相互作用し、RIKUJO JAPANの活動との連携により大会レガシーが定着・拡大

## 📋 事業内容

### 東京2025世界陸上1周年イベント

- 大会一周年を記念し、2026年10月10日にメインスタジアムである国立競技場で感動とレガシーを未来につなげる1周年イベントを「リレーフェスティバル2026」に合わせて開催。
- セレモニー、記念レース、展示、陸上教室など世界陸上の熱気を想起する取り組みを実施。

### 東京世界陸上記念ストリート陸上(仮称)

- 街なかでトップアスリートのパフォーマンスを観たり、気軽に陸上を体験できるイベントを実施。
- 2026年度は5月に都内で開催し、国立競技場で開催されるゴールデングランプリや、名古屋で開催される日本選手権への観戦意欲へとつなげていく。

### 世界陸上レガシー陸上クリニック(仮称)

- 全国各地の小学校を日本代表選手、国内・海外トップアスリート、レジェンドアスリートが訪問し、次世代を担うこどもたちにトップアスリートに触れる機会や、陸上を体験する場を提供。
- 2026年度は5月に、SEIKOゴールデングランプリ海外招待選手が参加し、都内小学校で開催予定。

### 国際基準の競技運営の研修

- 海外ディレクターの招聘等、国際基準のノウハウを国内主要競技会の担当者に継承することで国内において「魅せる競技会」を拡充する。
- 2026年度は5月17日開催のSEIKOゴールデングランプリで、東京世界陸上の進行ディレクターを招聘予定。

# 2026年度予算配分

過去最高レベルの収益を見込む「攻めの予算」。

増えた収益を「国際競技向上・キャパシティビルディング、デジタル戦略、機会と場の創出」へ還流させ、持続的成長を確実にする。

**収益：約21億6,000万円**（前年比 115.1%）

・パートナーシップの構造改革と戦略的チケット販売による大幅増収。

**費用：約21億6,000万円**（収支均衡）

・管理費を効率化・適正化しつつ、事業インパクトを最大化する「戦略的事业」へ大幅シフト。



**増益分は重点事業へ戦略的に再投資（3領域）**

## 1. 国際競技力向上・キャパシティビルディング：

海外派遣によるU23強化、三位一体（強化、医事、科学）プロジェクト。



## 2. デジタル基盤強化：

生涯記録サービス開発、エントリーシステム、セキュリティ強化、ファンクラブ拡充。



## 3. 機会と場の創出：

RIKUJO JAPAN事業の全国展開、SPEEDSTARによるムーブメント加速。



# 想定される議論① (システム・環境整備・熱中症対策)

## 現場の声①

登録者個々へのメリット還元と、地方陸協の業務負担軽減を。登録料改定の議論の前に、まずはシステム改修による現場の省力化という『約束』を果たしてほしい。

### 【回答・対応方針】

- ✓ **JAAF IDの価値向上:** 育成年代からの全記録を蓄積し、競技記録・資格情報を一覧できる「マイページ機能」を提供開始。  
これまで他企業が有料サービスとして提供していた「ランキング機能」を、日本陸連のシステムで記録情報の収集できるようになったことにより無償で提供開始。
- ✓ **エントリー関係業務負担の軽減:** 複雑な手続きを解消し、スマートフォンからでも大会にエントリーできるUI/UXへとシステムを刷新。資格審査業務や、加盟団体の承認作業負担を軽減。

## 現場の声②

厳格な公認基準で地方の競技場が減少している。

### 【回答・対応方針】

- ✓ **新しい施設認定基準の策定:** 公認競技場の減少に対応し、安全性と正確性を担保した上で「各地域の状況やニーズに応じた施設認定基準」の導入を、競技会基盤改革会議で方向性を定め、具体的に基準に落とし込む。

## 現場の声③

熱中症対策(WBGT基準)について、現場が迷わず判断できる明確な指針の徹底指導が欲しい。

### 【回答・対応方針】

- ✓ **命を守る安全基準の徹底:** WBGT31度以上での「原則中止・中断」を絶対的な数値基準とし、現場が躊躇なく判断できるよう「育成年代における競技会ガイドライン」、「主催競技会における暑熱対策について(2026年度以降)」を策定。
- ✓ **カレンダー改革の推進:** 育成年代における競技会ガイドラインをベースとし、真夏(7~8月)の競技会回避を原則とする「2シーズン制」の導入を進める。

# 想定される議論② (育成・部活動地域展開・インテグリティ・ガバナンス)

## 現場の声④

減少が顕著な女子生徒特有の健康障害(貧血・無月経等)への配慮が必要。

### 【回答・対応方針】

- ✓ **女子生徒の健康課題への配慮:** 「Well-beingプログラム」を通じて啓発活動の展開や啓発用コンテンツを作成し、指導者への啓発を徹底。

## 現場の声⑤

部活動の地域展開の問題解決のために『受け皿不足』を解消するハブ機能の強化を。

### 【回答・対応方針】

- ✓ **「地域展開への対応:** 質の高い(高い倫理観と指導力を持つ)指導者を養成し、2027年度からの「クラブ成立要件に有資格者の配置を義務付ける」といったルール整備を通じて、地域展開の受け皿となるクラブの環境・質を担保(バックアップ)する。
- ✓ **連携拠点の整備:** 現在4箇所の「JAAF認定トレーニングセンター」を全国6~10箇所に拡大し、部活動地域移行における自治体との連携拠点としても機能させる。

## 現場の声⑥

暴力や暴言を許さない指導者の育成、地方の内部問題も相談できるプライバシーを保護した窓口が必要。

### 【回答・対応方針】

- ✓ **高い倫理観を持つ指導者の育成:** コーチ資格の更新条件として「インテグリティ教育の義務化」を検討。指導者に対してWA(世界陸連)が制作したセーフガーディングに関するeラーニングの受講促進やコンプライアンス研修を義務化。
- ✓ **ハラスメント窓口の拡充:** 外部専門機関への委託を進め、相談者のプライバシーを完全に保護し、被害者が安心して声を上げやすい体制を確立いたします。

## 現場の声⑦

ガバナンスの形骸化を防ぐ実効性のある監査体制が必要。

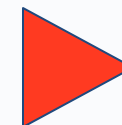
### 【回答・対応方針】

- ✓ **実効性のある監査と現場の声の反映:** 加盟団体の過去の事案を教訓に不正リスクを未然に防ぐ監査体制を構築。アスリート委員長の理事就任により、アスリート目線の課題を組織の意思決定にダイレクトに反映させる。

# 参考資料:アスレティックファミリーKPI (案) =直接コミュニケーション取れる人 (各年は1月~12月で計算する)

アスレティックファミリーを再定義。事業計画と連動して拡大を目指す。

カテゴリー		簡易ペルソナ	2024	2025	2026	2027	2028	
する	JAAFID有	陸連登録会員	競技者 (審判・指導者)	412,649	413,844	410,000	410,000	410,000
		陸連未登録者	元陸上部 (休眠状態) JAAF-START会員	278,868	451,241	531,241	611,241	691,241
みる	ぴあIDほか	チケット購入者	コア・ライトファン	35,451	36,058	70,000	75,500	81,000
	ぴあID	ファンクラブ 有料会員	コアファン	0	1,266	2,500	3,500	5,000
	ぴあID	ファンクラブ 無料会員 <b>【NEW】</b>	ライトファン・潜在顧客 無料招待来場者	0	0	60,000	100,000	150,000
		SNSフォロワー	潜在顧客	537,000	640,000	650,000	660,000	670,000
ささえる		ボランティア申込者	潜在顧客	765	1,162	1,500	2,000	2,500
つなげる		普及イベント参加者 (RIKUJO JAPAN等)	ライトファン・潜在顧客	1,075	5,840	8,000	16,000	32,000
		<b>合計</b>		<b>1,264,733</b>	<b>1,543,571</b>	<b>1,725,241</b>	<b>1,862,241</b>	<b>2,009,741</b>



各事業計画を  
実行する中で、  
**KPI達成**を目指す

第16期(2026年度)事業計画

「JAAF REFORM－中長期計画－」  
におけるダイヤモンドコンテンツ

未来に輝く人材育成と、感動体験の提供を目指して		実現 ウエルネス陸上の	人材育成	国際競技力向上	基盤 コンテンツ
重点的に取り組む課題 考え方:世界基準で事業を考える＝日本の良さを補強しながら、世界最高のクオリティを求める					
【事業計画の柱】	【具体的な事業】				
機会・場の提供	競技会の開催				
	陸上を行う環境の整備				
	RIKUJO JAPAN				
情報発信・コミュニケーション	システムを用いたコミュニケーション戦略				
	多様なコミュニケーションを用いた広報戦略				
	創立100周年記念事業				
	世界陸上レガシー事業				
人材育成	人材育成				
	アスリートの育成				
	指導者の養成				
	ささえる人材の養成(審判員の養成・ボランティアの活躍)				
組織基盤強化	国際戦略				
	組織基盤強化				
	ダイバーシティ&インクルージョンの推進				
	サステナブルの社会への貢献-SDGs				

<機会・場の提供> 競技会の開催

第15期(2025年度)開始時の現状・課題

【トップレベルの競技会(ゴールデングランプリ陸上・日本選手権)の現状と課題】

- 2020年のコロナ以降の日本選手権の観客数(チケット購入+招待)は、2020年(新潟):5,218名、2021年(大阪):8,566名、2022年(大阪):11,812名、2023年(大阪):16,963名、2024年(新潟):21,871名と徐々に増加傾向にある。ただし、チケット売上額についてはコロナ前のピークの金額水準に近づいているものの、チケット販売枚数では2016年(名古屋)の29,108枚と比較し、2024年(新潟)は13,856枚にとどまっている。
- 観戦者の分析(アンケート)では、2023年、2024年のゴールデングランプリ陸上のチケット購入者の6~7割が初めての観戦であった。
- 競技の魅力・楽しみ方を初めての観戦者にも伝える仕組みが不足している。初めての来場者の満足度を向上させ、リピート観戦につなげる施策が必要。

【アンダーカテゴリーの競技会】

- 現状:競技者育成指針に基づいたオリンピック種目に固執しない実施種目の開催や、資格記録を複数種目求めるなど参加資格を工夫している。
- 課題:競技会の仕組みの改善、身体的・心理的負担の軽減、適切な競技会スケジュールの調整。

【主催・主要競技会における暑熱対策】

- 近年、日本の夏季(特に7~8月)の気温上昇に伴い、安全を考慮した競技会設定として、陸上競技会における暑熱対策が重要になっている。

第15期(2025年度)活動目標

【ゴールデングランプリ陸上・日本選手権】

- ◆ 2大会で来場者10万人を達成し、競技会間の盛り上がりや連動させて東京2025世界陸上への熱を最大化。大会後を見据えた2026年度事業も検討。エンタメ性を強化し、現地観戦ならではの臨場感や分かりやすい演出・実況で観戦満足度を向上。初来場者(6~7割)の満足度向上を通じてリピーターと継続的なファン層を獲得(アンケート継続)。

【アンダーカテゴリー競技会】

- ◆ 低年齢層の早期専門化を防ぐため、2027年度以降の競技会制度改編を検討。選手・関係者の負担軽減を目的に、年間スケジュールの見直し案を策定。

【暑熱対策】

- ◆ 日本選手権(7月開催)を中心に、主要競技会でクーリングスペース等の暑熱対策を関係団体と連携して実施。

第15期(2025年度)成果と課題

【ゴールデングランプリ陸上・日本選手権】

- ◆ 両大会で来場者10万人を目標に、プロモーション強化、チケット販促、観客動員施策(区民招待・優待等)を実施した。結果として来場者数は合計約6.7万人となったが、世界トップレベルの競技会体験の提供を通じて、東京2025世界陸上に向けた機運醸成につなげた。また、初めての観戦者にも分かりやすい競技アナウンスの強化や、レース解説等をスマートフォンで聞くことができる音声配信サービスを導入するなど、観戦体験の向上に取り組んだ。

【アンダーカテゴリー競技会】

- ◆ 「育成年代における競技会ガイドライン」に基づく制度見直しと年間スケジュール再編に向けた検討を開始した。

【暑熱対策】

- ◆ 主催・主要競技会において、競技時間の調整、ミスト・給水環境の整備、医療体制の強化など暑熱対策を実施した。2025年度は応急的対応が中心であったため、今後は年間スケジュールの再編を含めた抜本的な対策の検討が必要である

【ゴールデングランプリ陸上・日本選手権におけるSDGsの実施】

- ◆ 3Rの理念を発信する「バトンプロジェクト」を実施するとともに、環境配慮型素材を使用した会場案内サインの設置など、競技会運営における環境配慮の取組を推進した。



<機会・場の提供> 競技会の開催

第16期(2026年度)活動目標

【ゴールデングランプリ陸上・日本選手権・MGC】

- ◆ 東京2025世界陸上を起点に、愛知・名古屋2026アジア競技大会、ロサンゼルスオリンピックへと続く「ビクトリーロード」を描く。ゴールデングランプリ陸上、日本選手権、MGCをその中核となる舞台として位置付け、トップアスリートが世界へ挑むための競技環境の整備や大会演出の充実を図る。
- ◆ 東京2025世界陸上および愛知・名古屋2026アジア競技大会を契機に陸上競技へ関心を持った層を国内主要大会への来場へとつなげ、「また来たい」「誰かを誘って来たい」と思える大会体験を創出する。
- ◆ 各所で同時進行する競技を分かりやすく伝える演出や観戦サポート、ファン施策を通じて観戦満足度を高め、新規来場者の定着とリピート率の向上を図る

【アンダーカテゴリー競技会】

- ◆ 発育発達段階に配慮した制度・種目設定および、「育成年代における競技会ガイドライン」に基づいた年間スケジュールの見直し、2シーズン制の検討を進め、競技継続率向上と選手・関係者の負担軽減につなげる。

【暑熱対策】

- ◆ 酷暑化が進む環境を踏まえ、暑熱を避けることを前提とした競技会の開催時期や運営方法を基本とする。
- ◆ そのうえで、暑熱対策を含め、安全性と持続可能性を両立した競技会運営モデルの実行と定着を進める。

【競技会におけるSDGs】

- ◆ 競技会運営において環境負荷の低減や資源循環を意識した取組を推進するとともに、3R(リデュース・リユース・リサイクル)の取組など、来場者と連携した持続可能な大会運営を進める。

第16期(2026年度)末に目指す姿

【ゴールデングランプリ陸上・日本選手権】

- ◆ 東京2025世界陸上および愛知・名古屋2026アジア競技大会を契機に陸上への関心層を拡大し、ゴールデングランプリ陸上・日本選手権において、観戦した人が「また来たい」と思い、さらに「誰かを誘って一緒にいきたい」と感じる大会体験をつくる。その連鎖によって観客が広がり、スタジアムに応援と感動の文化を育てていく。

【アンダーカテゴリー競技会】

- ◆ 発育発達段階に配慮した制度・種目設定および年間スケジュールの見直しが進み、アンダーカテゴリー競技会の枠組みが整理されている。
- ◆ その結果、競技継続につながる環境と、選手・関係者の負担軽減を両立した競技会運営体制が実現している。

【暑熱対策:酷暑化における競技会の在り方】

- ◆ 酷暑化を踏まえ、暑熱を避けることを前提とした競技会の開催や運営の考え方が国内主要大会において定着している。
- ◆ また、安全性と持続可能性を両立した暑熱対策を含む競技会運営モデルが確立されている。

【競技会におけるSDGs】

- ◆ 国内主要競技会において環境配慮の取組が定着し、廃棄物削減や資源循環などの施策が大会運営の標準となっている。来場者・運営が一体となり、持続可能な競技会として社会的価値を生み出す大会が実現している。

事業内容

トップレベルの主な競技会

【トラック&フィールド】

- ◆ <来場者数目標値>
    - ・ セイコーゴールデングランプリ陸上2026東京(5月17日/どこを見ても世界最高峰):2.8万人(前年度:2.1万人)
    - ・ 第110回日本陸上競技選手権大会(6月12日~14日/ナンバーワンだけが、見られる景色がある):5.8万人(前年度:4.6万人)
  - ◆ 東京2025世界陸上を契機に高まった陸上競技への関心を、セイコーゴールデングランプリ陸上、日本選手権、日本GPシリーズなどの国内主要大会や愛知・名古屋2026アジア競技大会への来場につなげるため、チケットの早期販売や開催地プロモーションを強化し、来場者数の拡大を図る。
  - ◆ 競技進行や場内演出を通じて、初めての観戦でも見どころや注目選手、クライマックスの瞬間を分かりやすく伝え、会場の一体感を高めることで観戦体験の向上とリピート率の向上を図る。
  - ◆ 日本GPシリーズについては、制度やシリーズの在り方を含めた見直しを行い、国内競技会体系におけるトップレベル競技会としての位置付けを明確化するとともに、各大会が無理なく継続開催できる運営の枠組みを整理する。
- 【マラソン:マラソングランドチャンピオンシップ(MGC)シリーズ2026-27】
- ◆ 「MGCシリーズ」のブランド価値を向上させるため、ファンやメディアにも理解しやすい形で仕組みの説明と合わせて、興味を引く工夫をし、ファンやメディアの関心を高め、スポンサーシップ価値の向上につなげる。ロサンゼルス2028オリンピックでのメダル獲得に向けて、加盟競技会とも連携し、世界との記録の差を縮めるためにペースメーカーの設定など、記録向上につながる大会運営の整備に取り組む。

アンダーカテゴリーの主な競技会

【トラック&フィールド】

- ◆ 第42回U20日本陸上競技選手権大会(2026年10月3日~10月4日)
- ◆ 第20回U18/第57回U16陸上競技大会(2026年10月23日~10月25日)
- ◆ 日清食品カップ 第42回全国小学生陸上競技交流大会(2026年11月22日)
  - ・ 特定の種目への専門化が低年齢層から進まないように、競技会の仕組みを見直す。
  - ・ 中期的には他のアンダーカテゴリーの主要競技会とのスケジュールも考慮し、短期間に競技会が集中しないよう、年間スケジュールを見直す。

暑熱対策/競技会におけるSDGs

【暑熱対策】

- ◆ 開催時期や競技開始時間の調整など、暑熱を回避することを基本とした競技会運営を推進する。
  - ◆ 選手・審判員・観客の安全確保の観点から暑熱回避を前提とした大会運営の指針や対応体制の整理を進める。
  - ◆ 加盟団体や大会主催者と情報共有を行い、暑熱回避を基本とした安全な競技会運営の普及を図る。
- 【競技会におけるSDGs】
- ◆ 主催大会において、3R(リデュース・リユース・リサイクル)の取組や再利用可能な制作物の活用を進め、環境負荷の低減に配慮した持続可能な競技会運営を推進する。

## <機会・場の提供> 陸上を行う環境の整備

### 第15期(2025年度)開始時の現状・課題

#### 【アスレティックスファミリーが集う拠点の整備】

- 現状:公認の陸上競技場数は、約20年で237ヵ所減少している。また、公認競技場継続のための維持管理にかかるコストが増大している。
- 課題:陸上を行う場を維持していくために、必要な費用を確保するための事例と、陸上競技の社会的価値の事例を示し、それを広めていく必要がある。各地域で必要とされる公認競技場の数や、練習環境がどのような状況かを十分に把握できていない中で、公認競技場の過不足の議論となっている。

#### 【競技会の安全性と正確性の確保】

- 現状:公認競技会の運営が支障なく行われ、樹立された記録が十分に信頼できる陸上競技場、長距離競走(歩)路とするため建設、整備、維持の指導、検定を実施している。国際基準に合致した陸上競技場、長距離競走(歩)路の確保に努めている。
- 課題:陸上競技場、長距離競走(歩)路は、全国どこでも正確で公平でよりよい環境で競技会が出来る施設が求められてきている。陸上競技場、長距離競走(歩)路の計測技術の向上と人材確保を行う必要がある。公認競技場数は減少傾向にあり、陸上を行う場の確保が危惧されている。

#### 【拠点設置事業の推進】

- 現状:地域に根ざした陸上拠点の整備として、本連盟において強化拠点となる施設を認定する「JAAF認定陸上トレーニングセンター」設置事業を進めている。
- 課題:競技会の開催、陸上選手の育成・強化のみならず、指導者養成やその他陸上の普及活動における「陸上」ができる場所の維持。また維持していくために「陸上」の価値をどのように創出していか。各地域で整備されたトレーニング拠点の情報が、十分に認知されておらず利用機会の損失となっている。

### 第15期(2025年度)活動目標

#### 【アスレティックスファミリーが集う拠点の整備】

- ◆ 行政等の施設所有者向けに、公認競技場の財政維持に関する支援情報(補助金・助成金・成功事例)を整理し情報を共有する。
- ◆ 陸上競技の社会的価値(競技場を使ったウォーキングやランニングイベントを通じた健康促進、トップアスリートや出身アスリートによるイベントを通じた地域活性化、教育的意義等の社会課題の解決)の好事例を、関係者や一般向けに情報を発信する。
- ◆ 公認競技場および陸上を行う場の維持のために、RIKUJO JAPANの事業と連携し、公認競技場だけでなく様々な場での陸上を体験する場と機会を増やす。

#### 【競技会の安全性と正確性の確保】

- ◆ 公認陸上競技場・公認長距離競走(歩)路・用器具検定の実施。
- ◆ 加盟団体と協力し、検定員、技術役員、自転車計測員の確保。また、検定(計測)技術の向上の研修を実施。  
 ・全国区域技術役員会議 ・検定員・技術役員合同実研修 ・自転車計測員A級・B級会議  
 ・検定員・技術役員セミナー
- ◆ アスレティックファミリーが集うための公認陸上競技場を確保するため、競技場施工会社・用器具製造会社の研修会議の実施。
- ◆ WA施設マニュアルに関する情報を施設所有者・施工会社・大会主催者に発信し、国際基準に合致した競技場、コースを確保していく。

#### 【拠点設置事業の推進】

- ◆ 自治体、施設所有者に「JAAF認定トレーニングセンター」の募集を周知する。
- ◆ 「JAAF認定トレーニングセンター」による施設所有者のメリットを周知する。
- ◆ 公式WEBサイトで「JAAF認定トレーニングセンター」の各施設を公開し、施設情報および活用の様子を掲載する。認定施設独自による情報発信とあわせて、PR支援等の連携をし、より広範囲に情報を届ける。

### 第15期(2025年度)成果と課題

#### 【アスレティックスファミリーが集う拠点の整備】

- ◆ 第14期(2024年度)に実施した環境整備プロジェクトによる「公認競技場に関する調査」の結果を踏まえ、公認廃止の陸上競技場の実態、公認陸上競技場の維持に係る課題および維持に向けた取組事例について整理・可視化。
- ◆ 施設所有者向け情報発信は行えなかったものの、個別協議を通じて競技場の確保に努めた。
- ◆ 「目指すべき競技会システムの在り方」という視点のもと、陸上競技場等の公認維持に関する課題の整理に着手。また、「世界基準で事業を考える」という観点から、WAの認証制度について理解の深化を図っている。
- ◆ 陸上の社会的価値について、RIKUJO JAPAN特設サイトにおいて連携イベントを紹介し、好事例を発信。
- ◆ RIKUJO JAPANの事業で紹介したイベントの公認競技会化や、室内陸上競技場の建設等に関する助言を通じ、日本の公認制度の特長を活かした取組を検討。公認競技場等の多様化に向けた準備を始めている。
- ◆ 公認陸上競技場等の維持にとどまらず、将来にわたり陸上を行う環境の維持・整備に向けた検討を開始しており、今後は具体的な施策および対応策の策定が課題である。

#### 【競技会の安全性と正確性の確保】

- ◆ 月2~3回の陸上競技場・長距離走(歩)路の検定審査の計画的実施、結果通知および改善事項の整理・回答。
- ◆ 計画した研修はすべて予定通り開催。技術向上・知見共有、情報提供を実施。新たに94名の区域技術役員委嘱。
- ◆ 東京2025世界陸上競技選手権大会に対応し、WA基準に基づく関連規定の改正および前倒しの適宜推進。
- ◆ 活動目標は概ね達成したが、これまでの取組・知見を踏まえた課題整理と「目指すべき競技会システムの在り方」の実現に向けた公認制度再構築の検討、人材育成体制整備は引き続き継続的に取組む。

#### 【拠点設置事業の推進】

- ◆ 「JAAF認定トレーニングセンター」として、2025年度は4施設を認定。公式WEBサイトに情報を公開するとともに、強化対象競技者等に向けたカンファレンスで情報共有を行った。
- ◆ 育成・強化や指導者養成等の地域拠点として機能する本事業であるが、認知度・活用拡大は発展途上であり、RIKUJO JAPAN連携や公式WEBサイトでのPR支援により、情報発信を強化し、認定制度の認知向上を図る。

<機会・場の提供> 陸上を行う環境の整備

第16期(2026年度)活動目標

【アスレティックスファミリーが集う拠点の整備】

- ◆ 「競技会基盤改革会議」で示された方向性の実現に向け、公認陸上競技場等の維持に関する課題を整理し、陸上を行う場の整備に寄与する。
- ◆ 日本の公認制度の特長を活かしつつ、国内施設の国際基準対応の推進を図る。
- ◆ 「RIKUJO JAPAN」事業と連携し、多世代・多志向の人々が継続的に陸上に関わることができる環境を整備し、陸上の社会的価値を広く発信することで、地域コミュニティの活性化と陸上文化の定着を図る。

【競技会の安全性と正確性の確保】

- ◆ 公認制度の再構築を進めつつ、施設・用器具の検定を適正に実施して安全性・信頼性を確保し、競技環境と公正な競技運営の基盤を維持する。
- ◆ 検定員、技術役員、自転車計測員の育成を行うため、会議やセミナー、実技研修等で技術習得・向上と知見共有を図り、全国的な技術水準の均質化と専門性の向上を図る。
- ◆ 競技場施工会社・用器具製造会社の理解を深め、公認施設や用器具の適正整備を促進する。
- ◆ 第15期(2025年度)より取組む「目指すべき競技会システムの在り方」の検討の推進にあたり、WA認証制度との連動が重要となる。そのため、WA基準の体系的な発信を行い、施設所有者、施工会社、競技会主催者等の理解促進を図る。これにより、国際基準に適合した競技場、長距離競走路および競歩路の整備・確保を推進する。

【JAAF認定トレーニングセンターの設置】

- ◆ 地域や関係者への認知度を高めることで、認定制度の理解と活用を促進し、拠点数の増加を図る。
- ◆ アスリートをはじめとするアスレティックファミリーが集う拠点としての機能を強化し、拠点の稼働率向上を図る。
- ◆ 強化合宿の拠点、指導者養成事業(指導者養成講習会等)の拠点、ならびに「RIKUJO JAPAN」事業のイベントと連動した普及活動拠点としての役割を明確化し、地域活性化や社会貢献、陸上関係者が集い、つながる環境づくりに寄与する。

第16期(2026年度)末に目指す姿

【アスレティックスファミリーが集う拠点の整備】

- ◆ 陸上を通じた社会課題解決事例や、財政面での課題解決の事例が増え、陸上競技場および陸上を行う場が維持・確保されている。
- ◆ 陸上競技場の各地域における好事例や、地域に必要とされる陸上競技場の取り組みが共有され、それらの情報を参考に地域特性に応じた地域に必要とされる取り組みが、全国の陸上競技場等で推進される。

【競技会の安全性と正確性の確保】

- ◆ 適正な公認陸上競技場・公認長距離競走(歩)路・用器具検定の実施ができています。
- ◆ マラソンコース計測の持続可能な体制構築。自転車計測員の層を厚くし、業務の偏りが解消されている。定期的に研修も実施し、精度と効率の向上が実現している。
- ◆ 国際基準の変更に対して、素早く国内の対応ができています。国際基準を満たした陸上競技場を維持していくため、必要に応じてWAIに提案ができています。

【JAAF認定トレーニングセンターの設置】

- ◆ 6~10箇所の施設が「JAAF認定トレーニングセンター」として稼働し、アスリートの利用、本連盟強化事業およびその他事業により稼働が高まる。
- ◆ アスリートや関係者にとってさらに有益で実効的なプラットフォームを作り上げるとともに、施設の魅力を伝えることで、多くのアスリートやコーチが施設を活用しやすくなっている。
- ◆ 認定施設が地域における重要な陸上拠点となり、自治体との連動や支援を受け、運動部活動地域展開における拠点としても活用される。

事業内容

アスレティックスファミリーが集う拠点の整備

【公認陸上競技場等の維持・整備と国際基準への対応】

- ◆ 「競技会基盤改革会議」で示された方向性の実現に向け、公認陸上競技場等の効率的な維持・整備と国際基準への対応を推進するため、公認制度の再設計。

【街中の活動拠点の創出】

- ◆ 「RIKUJO JAPAN」事業と連携し、公認競技場等に加えて街中のオープンスペース等を活用した陸上イベントや交流機会の実施。
- ◆ 公式WEBサイト等を通じて、気軽に陸上を楽しめる場の情報発信を行い、多様な陸上体験の機会の創出。

競技会の安全性と正確性の確保

- ◆ 公認陸上競技場を維持していくために、施設所有者が抱える財政面や運営の課題を解決するための具体的な方法(提案や対応策)を整理し、公式WEBサイト等で情報提供。
- ◆ WA認証制度の理解深化と規程改正への的確な対応のため、WA施設マニュアルの日本語版の作成。
- ◆ 全国検定員会議・実技研修、検定員・技術役員セミナー、全国自転車計測員会議・実技研修等を開催し、競技会の安全性および正確性を担保する有識者の人材育成。

JAAF認定トレーニングセンターの設置

【情報発信のプラットフォーム化と認知拡大】

- ◆ 公式WEBサイトを全国の認定施設情報をまとめたプラットフォームとして整備し、制度の認知度を高めるため広報・PRを強化。

【拠点特性を活かした運用支援と機能強化】

- ◆ 各拠点の活動報告をもとに、それぞれの特長を活かした取組を進めながら、アスレティックスファミリーが集う場としての魅力を高め、施設の利用促進と地域に根ざした陸上文化の定着につなげる。

## <機会・場の提供> RIKUJO JAPAN

### 第15期(2025年度)開始時の現状・課題

- 2025年度より事業部(RIKUJO JAPAN)を窓口として本格運用。デカチャレ備品貸出等を起点に連携を拡大し、連携事業数は23事業。  
→開催地域・時期に偏りがあり、全国展開には至っていない。内部運営のみでは限界があり、外部連携の強化が必要。
- 認知拡大・情報発信強化のため、SNS(Instagram)運用を5月より外部委託。→継続的な露出確保と認知拡大効果の向上が課題。
- 特設サイトを整備。連携イベント情報、連携申請情報等を掲示。→活用促進・導線強化の余地あり。
- 外部委託によるRIKUJO JAPAN事務局を本格稼働。→事業拡大を見据えた業務整理と運営効率の向上が必要。
- グッズ制作・販売を実施。ポロシャツ806枚、タオル476枚販売。→販売機会に限られる中、収益性と認知拡大の両立が課題。
- オリジナルコンテンツ「SPEED STAR」を開催。東京・大阪で各1回、参加者1,059名。→自走化に向けライセンス契約を締結。外部主催大会拡大と露出・収支改善が課題。
- サロン事業を2回実施。→情報取得や新規案件創出につながる、参加メリットの明確化が必要。

### 第15期(2025年度)活動目標

- ◆ 2回開催するスピードスターの参加者1,000名以上  
(多世代・陸上以外の競技愛好者を含む)  
→RIKUJO JAPANをムーブメント化する契機としてのイベント
- ◆ パートナー企業や陸上関係者が出会うためのサロン4回開催の参加者・参加企業数を前年度より増加させ、アンケート等により事業の評価をモニタリング
- ◆ クリニック/キャラバンの1回実施により課題・成果を検証し 実施モデルを形成
- ◆ デジタルコミュニケーションの強化

### 第15期(2025年度)成果と課題

- ◆ RIKUJO JAPANのフラッグシップイベントとなるSPEED STARを2回開催(東京・大阪)。参加者1,059名と目標を達成。地域・他競技との接点を創出。  
→SPEEDSTAR開催回数を増やすための自走化に向け、ライセンス契約を締結。外部主催大会の拡大と露出・収支改善が今後の課題。
- ◆ サロンを2回実施。有意義との声はあるが、開催回数が目標回数に至らなかった。  
→情報取得・新規案件創出につながるネットワーキング機能の強化が必要。
- ◆ SEIKOゴールドングランプリ直前にRIKUJO JAPANクリニックを実施。都内小学校でサニブラウン選手ほか海外招待選手が参加。  
→自主事業にとどまり、企業連携事業への展開には至らなかった。
- ◆ 認知拡大・情報発信強化のため、SNS(Instagram)運用を5月より外部委託。
- ◆ 特設サイトを充実。連携イベント情報、新たに連携する事業の取り組みの背景、連携申請情報の掲示を開始。
- ◆ 2025年度より普及事業の窓口を事業部(RIKUJO JAPAN)に移管。連携イベントが増加し、実施・連携事業数は23事業。  
→開催地域・時期に偏りがあり、全国展開には未達。外部連携の強化が必要。
- ◆ 外部委託によるRIKUJO JAPAN事務局を本格稼働。
- ◆ グッズ制作・販売を実施。ポロシャツ806枚、タオル476枚(利益約80万円)。  
→販売機会に限られる中、認知拡大の機会創出が課題。
- ◆ RIKUJO JAPAN連携事業の活動促進を目的に「CAMPFIRE for Sports」に参画。※競技団体として5団体参画。(2026年2月1日現在)

<機会・場の提供> RIKUJO JAPAN

第16期(2026年度)活動目標

- ◆ RIKUJO JAPAN連携イベントの年30回以上の開催 2025年対比150%
- ◆ 陸連主催だけでなく、RIKUJO JAPANを通じた連携事業が各地方(北海道、東北、関東、中部、近畿、中四国、九州)で開催されている状態を目指し、ロールモデルの横展開へ。各地域での企業や行政連携の拡充を図る。
- ◆ RIKUJO JAPAN主催・連携事業の参加者目標:累計8,000人 2025年対比150%
- ◆ スピードスターの参加者1,500名以上(陸連実施2回に加え、ライセンス契約団体の活動の活性化)
- ◆ 人材プール構築(アスリート、指導者、ボランティア等) 協力できる場所、時期に応じRIKUJOJAPAN事業への協力者を募る。
- ◆ 情報発信力の強化(2次発信含む)

第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ 毎年のイベントにより、RIKUJO JAPANの理念が可視化され、理念の共有と全国各地域において普及の場が確保されている。  
→ 賛同者や競技人口の増加に結びついている。
- ◆ サロンやキャラバン等の多様なターゲット向け事業により、RIKUJO JAPANがムーブメントとして展開されている。
- ◆ デジタル発信の強化により
  - ・ 「RIKUJO JAPAN」の認知度の向上、
  - ・ 事業への参加者・参画企業等の増加、
  - ・ 陸上人口の増加等の好影響が観察できる。

事業内容

自主イベント実施・リアルでの場・機会の創出	自主イベント実施・リアルでの場・機会の創出	制作物作成等・協賛等収入源の獲得
<p>【スピードスター】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 10/30 行幸通り、その他1回を主催。</li> <li>◆ ライセンス契約先団体の主催イベントとを合わせて、地域を象徴するようなオープンスペースにて陸上体験機会の提供と開催地の陸上の普及に貢献。他競技との交流促進、メディア、企業、行政との連携深化。</li> </ul> <p>【RIKUJO JAPANサロン】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 各ステークホルダーの交流場としての強化。情報共有ができる場、新たな取り組みの生まれる場とする。</li> </ul> <p>【連携イベント】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ RIKUJO JAPANの連携事業を通じ、全国各地域で陸上に触れる機会を創出し、RIKUJO JAPANムーブメントの拡大を促進。</li> <li>◆ 企業、行政、加盟団体などとの連携を行い、社会課題解決への貢献。 例:アシックスx立命館大学との連携</li> <li>◆ 本物に触れる機会の創出 3回ほど開催 ・ 例:仙台(2025年実施)、GGP(2025年実施)、他スポーツとの連携 ・ 例:筒香アカデミー(2025年実施)、パートナー企業と協働で地方開催</li> </ul>	<p>【普及備品関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 備品の更新 光電管セットの更新、他備品の更新、効率的な運用のために管理方法の更新、備品の保管料、諸経費など。</li> <li>◆ RIKUJO JAPANブース(デカチャレ)にてRIKUJO JAPANの世界観、理念を体感いただくための備品購入など。</li> </ul>	<p>【ポロシャツ・タオル・新規グッズ制作】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ RIKUJO JAPANポロシャツ、タオル等の増産と販売。</li> <li>◆ 新規グッズの制作と販売。企画販売等を外部委託。</li> </ul> <p>【パートナーの獲得】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ RIKUJO JAPAN活動に共感いただけるパートナーの獲得。</li> </ul>
	<p>情報発信・デジタルコミュニケーションの促進</p>	<p>事務局体制</p>
	<p>【SNSチームの運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ RIKUJO JAPANムーブメント拡大の為の情報発信強化</li> <li>◆ デジタルネイティブを含むチームの構築と強化</li> <li>◆ キャンペーン施策等</li> </ul> <p>【WEBコンテンツ作成・運用】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 特筆すべき連携イベントの記事化と発信</li> <li>◆ 動画コンテンツ作成</li> <li>◆ 記事公募→RIKUJO JAPANを考える機会創出</li> </ul> <p>【PR部隊運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ PRエージェンシーとの協業によるメディアタイアップやメディアリレーションの強化</li> </ul>	<p>【事務局運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 事務局運営を外部へ業務委託</li> </ul> <p>【人材プール】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 資格保有者の人材プールの構築</li> <li>◆ 補助員の人材プールの構築</li> </ul> <p>【備品管理などの外部提携】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 備品管理業務の提携の模索</li> <li>◆ 実施にあたっての資料作成業務の提携の模索</li> </ul> <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 商標登録費など</li> </ul>

## <情報発信・コミュニケーション> システムを用いたコミュニケーション戦略

### 第15期(2025年度)開始時の現状・課題

- ▶ ウェルネス陸上の実現のために、本連盟が生涯を通じてアスレティックファミリーに寄り添うことができる基盤整備(システム開発)を目指している。
- ▶ コミュニケーションを取る基盤として、登録システムの開発、2023年度から改善および改修を進めている。
- ▶ また登録会員になることのメリットは、公認競技会の参加や、公認記録の取得であるが、現状公認記録を会員へフィードバックするサービスの提供ができていない。
- ▶ STEP1として「する人」に関するシステム開発を行っており、2025年度から記録サービスを開始する。
- ▶ 大会エントリーに関して、加盟団体の業務は多大なものとなっている。大会エントリーに関する業務の省力化(受付業務、記録チェック、登録情報チェックの省力化)を目指して、システム開発をおこなってきた。導入された加盟団体からは概ね好評を得ており、今後より多くの加盟団体での導入を促進し、陸上界全体の業務改善へとつなげていく。
- ▶ 「する人」向けのサービス開発はおこなってきたが、「ささえる人」向けの開発は未着手である。STEP2として「ささえる人」(審判員)に関するシステム開発の検討を開始し、2027年度からのサービス提供を目指す。
- ▶ 日本陸上競技選手権大会、ゴールデングランプリ陸上(GGP)へのファンの来場者増については、ここ数年アンケートなどを実施し、その方策について検討をおこなってきた。しかしながら、現状来場者の把握に至っておらず、来場者に今後の大会情報などを届けることができていない。また2025年は世界陸上競技選手権大会を東京で開催するため、ファンが増えることが期待される。この好機を2026年以降の日本選手権、GGPなど競技会の来場者の増加に活かすべくコアファンの獲得施策も開始する。

### 第15期(2025年度)活動目標

- ◆ 登録システムの利便性の向上、プッシュ型情報提供の本格実施。
- ◆ ファンクラブの開始(コアファンの獲得目標会員数:500名)。
- ◆ 記録サービスの開始・改善。
- ◆ エントリーシステムの利用促進(都道府県利用率50%)。
- ◆ 審判員管理機能開発のためのヒアリング、要件定義。

### 第15期(2025年度)成果と課題

- ◆ 基盤整備として目指すシステム:登録・大会エントリー・記録サービス・ファン登録・審判員登録・指導者登録。STEP1「する人」向け(登録・大会エントリー・記録サービス)およびファン登録は、一定の成果を上げ、概ね計画どおり整備を完了。STEP2「ささえる人」向けの開発へと段階を移行。
- ◆ 登録システムは、利便性を向上。登録者および承認団体の操作習熟も進み、問い合わせ件数も減少している。
- ◆ プッシュ型情報提供メルマガ「JAAFファミリーinfo」による週1回の定期情報配信を開始。配信対象者は順調に拡大し、2024年度末の65,000人から80,000人を超え、陸上の多様な楽しみ方の発信を推進。
- ◆ 2025年2月開始の「RIKUJOファンクラブ」は、12月末時点で会員数1,266名となり、獲得目標会員数の500名を大幅に上回った。加えて、ファンクラブ限定特典(壮行会、公開練習招待、イベント特設席観戦、チケット先行販売等の優待施策)を実施し、会員満足度向上および新規会員獲得に寄与。
- ◆ 記録サービスを開始し、公認競技会結果や出場履歴等の記録データの一元提供および従来有料であったランキング情報の無料公開を実現し、登録会員のメリット向上につなげた。
- ◆ 全国の公認競技会約4,500大会のうち1,000大会以上でエントリーシステムを導入し、加盟団体への活用拡大により競技会運営業務の省力化を実現。都道府県単位での利用については、テスト運用を含めて40を超える加盟団体において活用が進んでいる。
- ◆ 審判員管理機能の開発に向け、要件定義に向けた初期検討を進め、主要課題の洗い出しを実施。
- ◆ 第15期(2025年度)事業内容として掲げた、登録者数のさらなる増加を見据えた申請制度の見直しおよび登録料体系の単純化については未着手であり、登録者動向を踏まえた段階的かつ計画的な検討が必要である。

<情報発信・コミュニケーション> システムを用いたコミュニケーション戦略

第16期(2026年度)活動目標

- ◆ 今後の登録者数の増加を見据え、登録者にとって分かりやすく、また加盟団体をはじめとする運営側にとっても運用しやすい形へと登録システム、登録制度の最適化を図る。
- ◆ 「RIKUJOファンクラブ」の会員数について、2,500名の獲得を目標とする。身近で気軽に陸上に触れられる機会として多様なコンテンツを提供し、アスレティックファミリーの拡大につなげる。
- ◆ 登録会員に全国公認競技会の結果や記録ランキング等の記録情報を提供し、会員がこれらの情報を楽しむことで、競技会への出場意欲を高める。
- ◆ 陸上界における定着を目指し、現行のエントリーシステムの利用率をさらに高める。都道府県においては、全47加盟団体が利用している状況の実現を目指す。
- ◆ 審判員管理業務のシステム化に必要な機能開発を進めることで、加盟団体に対しては審判員委嘱業務の省力化を図り、審判員に対してはデータに基づく活動履歴の公開を提供する体制の整備を目指す。

第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ 登録者がスムーズに登録作業が行え、問合せも殆ど無い。
- ◆ 日本選手権、GGPでハイグレードチケットはファンクラブ会員ですぐに売り切れる。
- ◆ 登録会員が記録情報を楽しみ、ランキングを活かした大会参加の仕組みが開始される。
- ◆ エントリーシステムの利用が促進され、陸上界の標準仕様になる。審判員委嘱・管理の機能を2027年度から提供する。

事業内容

コミュニケーション基盤の最適化	アスレティックファミリーへのサービスの充実	加盟団体の業務改善
<p>【登録システムの利便性の向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 登録者および登録承認団体の利便性向上を図るため、操作性の改善を継続的に実施。</li> </ul> <p>【現行登録制度の単純化の検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 現行の登録申請手続きおよび登録料・料金体系の課題整理。</li> <li>◆ 登録・料金区分の単純化に向けた制度設計案の策定。</li> </ul> <p>【アスレティックファミリー拡大に向けたファンクラブ活用】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 会員獲得に向けたプロモーション施策の企画・実施。</li> <li>◆ 日本選手権およびGGPにおけるファンクラブ会員向けハイグレードチケットの優先販売施策の実施。</li> <li>◆ ファンクラブ会員の行動データ収集と分析による購買傾向や参加意向の把握。</li> <li>◆ 分析結果を基にした会員向けサービス改善や販売施策の最適化。</li> </ul>	<p>【記録サービスの充実】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 2025年度より開始した記録サービスについて、小学生・中学生期から競技引退後、さらに成人後に陸上やマラソンを再開した場合でも、生涯にわたり記録が一元的に閲覧できるよう、データを蓄積していき、活動履歴を楽しむサービスの充実化。</li> <li>◆ 現行の記録システムをカスタマイズし、利用者ニーズに応じたカテゴリーの多様化。</li> </ul>	<p>【エントリーシステムの利用促進】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ エントリー受付、資格審査、参加料徴収等の競技会運営業務の効率化を目的に、エントリーシステムの利便性向上を図り、利用を促進。</li> </ul> <p>【審判員管理に関する機能開発】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 登録システムを活用して名簿化を行い、審判員資格保有者の管理。</li> <li>◆ コンプライアンス研修を含め、全国的に標準化した審判員講習会の実施体制を整備・具現化。</li> <li>◆ 審判員委嘱、集合やタイムテーブル等の各種案内、競技会当日の受付等の業務フローを一元して管理することが出来るシステムの検討の開始。</li> </ul>

<情報発信・コミュニケーション> 多様なコミュニケーションを用いた広報戦略

第15期(2025年度)開始時の現状・課題

- ▶ 現状、日本代表や国内の大会ごとの情報をメインに、本連盟WEBサイトとSNSを中心に発信している。2024年度は、パリ2024オリンピック日本代表の裏側を伝える映像を制作配信した。また、各委員会やプロジェクトの活動もコンテンツとして発信し、プッシュ型の「JAAF News」メルマガなどで届けている。
- ▶ 課題として、本連盟の各事業の取組や活動の理解度を深められておらず、コンテンツ発信は不十分である。またステークホルダーごとの情報制作や見せ方、プッシュ配信等の届け方が出来ていない。
- ▶ 2025年度は、地元開催の東京2025世界陸上競技選手権大会(以下、東京2025世界陸上)などがありファン拡大のチャンスなので、アスリートを知ってもらうための情報発信を増やし、強化したい。

第15期(2025年度)活動目標

- ◆ 日本代表情報をメディアと本連盟の両軸から情報を発信
- ◆ 認知度を上げるため、各選手情報の制作・発信を強化
- ◆ する人、見る人、支える人にとって整理された情報の提供
- ◆ 各ステークホルダーに向けた、プッシュ型情報発信を毎月実施

多様なコミュニケーションについて

WEBサイトやSNSなどのデジタルツールの活用や、競技会や会見等のリアルな場の設定など、様々な媒体、手法をユーザーにあわせたコミュニケーション手段を組み合わせて効果的に情報発信や価値向上を図る戦略

第15期(2025年度)成果と課題

【日本代表情報発信】

- ◆ 代表発表、スカイツリー点灯式、壮行会、公開練習等の戦略的实施による露出機会の創出
- ◆ 多数のメディア取材を通じた「東京2025世界陸上」の機運醸成およびチケット販売の促進

【陸連公式サイト運用・デジタル発信】

- ◆ 東京世界陸上特設サイトへの日本代表情報集約による過去最多400万PV(パリ五輪比約3倍)の達成
- ◆ 事前合宿や壮行会、公開練習など、計31本の動画制作による舞台裏ストーリーの発信

※東京世陸ではパリ五輪から新たに、入賞者インタビューを実施

【最適な情報提供】

- ◆ 「する・見る・支える」の各ユーザーに応じた競技情報の提供。
- ◆ アスリート委員会と連携した、誹謗中傷、迷惑撮影防止に関する声明発信
- ◆ 公式サイト、SNS等における情報の整理と画像を使用した見せ方の改善

【プッシュ型情報発信】

- ◆ 役員、加盟団体向け(約220通)および登録会員向け(約8.4万通)メルマガの定期的配信
- ◆ 平均クリック率13%(一部1桁台)に留まる現状改善のための工夫



<情報発信・コミュニケーション> 多様なコミュニケーションを用いた広報戦略

第16期(2026年度)活動目標

- ◆ アスレティックファミリーの拡大に向けた、世界陸上の熱狂をアジア大会へ繋ぐ戦略的な日本代表情報の発信
- ◆ 「する・見る・支える・つながる」を体現する、ユーザー利便性の高い公式WEBサイト、SNSの構築・運用
- ◆ 各ステークホルダーの属性に最適化した、プッシュ型情報発信の強化
- ◆ 社会との共生および組織基盤の強化を目指した、広報機能の強化

第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ 本連盟公式SNSのフォロワーの増加により、直接コミュニケーションが取れる対象者が増える。
- ◆ 競技会への観客動員を増やし、アスリートのパフォーマンスを後押しする応援文化を醸成する。
- ◆ する、見る、支える、つながるJAAF ID 登録者とファンクラブ会員が増える。
- ◆ 各ステークホルダーとのコミュニケーションが深まる。

事業内容

日本代表情報発信の強化	WEBサイト制作・運用	オフィシャルコンテンツ・映像制作	社会と組織をつなぐ広報強化
<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 「日本代表」をきっかけに陸上競技への関心を高め・つながることを目的に、イベントや情報発信を実施。ファン拡大に向け戦略的に推進する。</li> </ul> <p>【日本代表記者会見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 日本代表の露出拡大のために、日本代表内定選手によるメディア向け記者会見を実施。</li> </ul> <p>【日本代表チームSNS発信強化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 直接つながるファン獲得のために、SNSの発信を強化しフォロワー数増加(SNS合計65万フォロワー)を図る。特に未来を担う若年層の取り込みを目的とした施策を実施。</li> </ul> <p>【デレゲーションブック制作】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ アジア大会日本代表選手団の情報、過去の記録等データを集約したデータブックを作成。データはバーチャルミュージアムにアーカイブ。</li> </ul> <p>【カレンダー制作】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 2026年の日本代表選手の活躍を中心にカレンダーを制作し、ファンクラブ特典などに活用。D&amp;Iを意識し作成。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 「する・見る・支える・つながる」を体現する情報基盤として、ユーザー利便性の高い公式WEBサイトおよびSNSの構築・運用を行う。</li> </ul> <p>【陸連公式WEBサイトの改修】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 陸連のメッセージが伝わり、必要な情報にアクセスしやすくするために、陸連公式WEBサイトやSNSを改修。</li> </ul> <p>【WEBサイト、SNS等の定期運用強化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 適切なタイミングと内容での情報発信を行うことで、ユーザーとの継続的な接点を創出し、WEBサイトおよびSNSの運用体制を強化。</li> </ul> <p>【愛知・名古屋2026アジア大会・特設サイト制作】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 自国開催となるアジア大会の情報を集約した特設サイトを制作し、特に日本代表選手の情報発信を強化することで、ファンクラブ会員の拡(2,500人)につなげる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 本連盟の各事業やプロジェクトへの理解を深めてもらうため、事業内容を分かりやすく伝えるコンテンツ制作と、ステークホルダーの属性に応じたプッシュ型情報発信を強化する</li> </ul> <p>【各事業コンテンツ制作】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 委員会活動(強化、指導者など)、人材育成(ダイヤモンドアスリート、ライフスキルトレーニングなど)、社会貢献(SDGs、ダイバーシティ&amp;インクルージョンなど)といった各事業について、内容や意義を伝えるコンテンツを制作。</li> </ul> <p>【メールマガジン】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 評議員・理事・監事・加盟団体・協力団体向け「ひととき日本陸連だより」、登録会員向け「JAAFファミリーinfo」に加え、ファンクラブ登録向けメルマガを開始。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 社会と組織(陸上)をつなぐ広報機能を強化し、各部署を横断した情報発信と迅速な対応ができる体制を整えるため、組織広報体制および業務対応の強化を図る。</li> </ul> <p>【組織広報戦略の立案・実施】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 専門人材、会社を活用し、組織広報戦略を策定。年間の情報発信計画やメディアとの関係構築を進め、戦略的な広報活動を展開。</li> </ul> <p>【リスクマネジメント強化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 組織基盤の強化を目的に、想定されるさまざまなリスクを事前に整理し、組織としての対応方針や体制整備を進行。</li> </ul>

<情報発信・コミュニケーション> 創立100周年記念事業

第15期(2025年度)開始時の現状・課題

- > 2025年、本連盟は創立から100年を迎え、東京の国立競技場で9月13日から開催される「東京2025世界陸上競技選手権大会」に向け、東京2025世界陸上財団と連動して準備を進めている。
- > 100周年目にピンポイントで振り返り祝うだけにせず、新しい未来に向けて挑戦し、つなげる一年にすることが課題である。そして、地元開催の東京2020オリンピックでできなかった、アスリートをリアルで応援してもらうための取り組みや、日本の陸上界の未来へのレガシーをつなげていくことが求められる。

第15期(2025年度)活動目標

- ◆ 歴史、データ、研究資料などオープンに誰もがアクセスし、発信できる情報提供(2025年12月に公開)
- ◆ 誰もが陸上を楽しめる場としてのイベントの開催

第15期(2025年度)成果と課題

- ◆ これまでの歴史やデータを掲載したバーチャルミュージアムを開館
- ◆ ~日本陸連100周年記念~RIKUJOフェスティバル in 国立競技場を開催
- ◆ 100周年事業を単年の事業とせず、次の100年を支える基盤となる事業としていく



第16期(2026年度)活動目標

- ◆ バーチャルミュージアムが知の集結となるように、研究データの収集、協力者との連携を行い自走できる体制づくりを行う
- ◆ 競技力と人間力を兼ね備えた人材育成と、引退後アスリートの次世代リーダーキャリア形成を支援する仕組みの構築
- ◆ RIKUJO JAPAN活動をさらに活性化させる

第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ アスリートや多くの人が情報提供に参画し、頻繁に情報が更新され、ここにアクセスすれば陸上の新しい情報が入手できる
- ◆ アスリートが企画実行するイベントや全国各地での陸上を体験する場が増加
- ◆ 陸上以外でも社会で広く活躍できる人材育成のシステムがスタートする
- ◆ 人権ポリシー、インテグリティー行動指針が広く認識され、陸上界のインテグリティーが高まる

事業内容

バーチャルミュージアムの充実

- ◆ 陸上競技に関する研究データ、論文などに簡単にアクセスできるように、機能の充実をはかる。
- ◆ 大学などと連携し、若い人材も活用しながらさまざまな協力者によって、コンテンツの充実がなされるようにする組織づくりを行う。
- ◆ 加盟団体にも依頼して、各加盟団体が保持している情報を提供してもらい、バーチャルミュージアムに格納する。
- ◆ 関係者以外の一般の方からの情報提供を依頼し、提供された情報を格納していく仕組みを構築する。
- ◆ サロンを起点に、パートナー・メディア・アスリートの対話から生まれる新たな発信や企画を推進する。
- ◆ バーチャルミュージアムの充実に関わる人を増やしていくことで、陸上を愛する人材を育成・拡大させていく。

「陸上の枠を超えるリーダーの人材育成」、「RIKUJO JAPANの推進」、「スポーツインテグリティとD&Iの推進」に関しては別シートを参照

<情報発信・コミュニケーション> 世界陸上レガシー事業

第15期(2025年度)開始時の現状・課題

- > 2025年、本連盟は創立から100年を迎え、東京の国立競技場で9月13日から開催される「東京2025世界陸上競技選手権大会」に向け、東京2025世界陸上財団と連動して準備を進めている。
- > 100周年目にピンポイントで振り返り祝うだけにせず、新しい未来に向けて挑戦し、つなげる一年にすることが課題である。そして、地元開催の東京2020オリンピックでできなかった、アスリートをリアルで応援してもらうための取り組みや、日本の陸上界の未来へのレガシーをつなげていくことが求められる。

第15期(2025年度)活動目標

- ◆ 日本代表を身近で応援してもらう機会の設定とグッズの制作販売による機運醸成

第15期(2025年度)成果と課題

- ◆ ~日本陸連100周年記念~RIKUJOフェスティバル in 国立競技場を開催
- ◆ RIKUJOファンクラブ会員を招待して、東京2025世界陸上壮行会、公開練習の実施
- ◆ 東京2025世界陸上に向けて、日本代表応援タオルを作成し、GGP、日本選手権で配布。世界陸上期間中にも道路種目の沿道で配布し日本代表応援の機運を醸成
- ◆ 世界陸上で盛り上がった日本代表を応援、陸上競技の観戦を一過性ではなく、文化として定着させる

第16期(2026年度)活動目標

- ◆ 東京2025世界陸上の盛り上がりを今後につなげるために、応援用ベースボールシャツを制作し、日本選手権で配布する
- ◆ 世界陸上財団からの拠出金を活用した世界陸上レガシー事業として、1周年イベント、ストリート陸上、クリニック事業、海外ディレクター招聘した研修事業を実施

第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ 世界陸上を観戦した人たちが、GGP、日本選手権を観戦し、アジア大会でも日本代表を応援する
- ◆ 2025年、2026年を通じて陸上競技の観戦文化が定着する
- ◆ 世界陸上レガシー事業を通じて、人々が東京世界陸上の感動を思い起こし、今後の大会の観戦、スポーツ活動を行うきっかけとなる。

事業内容

日本代表応援文化の醸成	東京2025世界陸上1周年イベント	東京世界陸上記念ストリート陸上(仮称)
<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 日本代表Tシャツを制作し、日本選手権の来場者に配布し、誘客につなげる</li> <li>◆ 日本代表応援用ベースボールシャツを着用して日本選手権を応援してもらうことで日本代表応援文化を醸成。</li> <li>◆ 日本選手権での応援を経験した観戦者にアジア大会にもTシャツを持参してもらい、会場をサンライズレッドで染める。国内開催の国際大会で日本代表を応援してもらうことで、2027年以降の観戦にもつなげる。</li> </ul> <p>※競技会の開催事業と連動</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 東京世界陸上の大会協力への感謝を伝え、感動、レガシーを未来につなげるためにイベントを実施</li> <li>◆ みんなでつなごうリレーフェスティバルを活用して、国立競技場で実施</li> <li>◆ セレモニー、記念レース、展示、体験教室などを想定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 東京世界陸上の開催を記念し、5月上旬に都内で開催</li> <li>◆ 街なかでアスリートの躍動を間近に感じてもらう</li> <li>◆ 東京世界陸上の感動を再び呼び起こし、ゴールデングランプリ、日本選手権への観戦につなげる</li> </ul>
		<p>世界陸上レガシー陸上クリニック(仮称)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 全国各地で小学校をアスリートが訪問し、次世代を担う子どもたちにスポーツのきっかけを提供する</li> <li>◆ 2026年~2028年の3年間で全国約10会場を目安とし、実施を計画する</li> <li>◆ 2026年度は2会場程度での実施を予定する</li> </ul>

<人材育成>

第16期(2026年度)活動目標

- ◆ アスリート:競技力と人間力を兼ね備えた国際人の育成
- ◆ ささえる人材:専門性と倫理観を兼ね備えた質の高い指導者・運営者の育成
- ◆ 国際戦略:日本が国際的に影響を与えられる「国際的人材」育成し、積極的にポストの獲得とアジアへの貢献
- ◆ 社会との共創:マザーオブスポーツとなる陸上の要素を活用し、社会課題の解決を行政、企業等の団体と連携し社会との共創を推進し、活動を通じてその担い手となる人材の成長と活躍の機会を広げる。

第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ 母なるスポーツ 陸上を通し、「主体性」と「社会性」を育み
- ◆ 陸上と社会の未来を切り拓いていくアスリート・指導者が養成されるよう陸上界を越え、あらゆる業界とともに、共有・共創し推進していく
- ◆ 目指す社会:陸上に関わる全ての人が輝く社会をつくる
- ◆ 目指す人物像:自らを輝かせ社会を照らし人生を豊かにしていく人

事業内容

アスリート	ささえる人材	国際戦略	社会との共創
<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ ダイヤモンドアスリートプログラム、ライフスキルトレーニング、ハイパフォーマンスリーダーズプログラムを通じ、競技力向上はもとより、社会でも輝き続ける人材育成プログラムの提供。</li> <li>◆ 「強化・医事・科学」の委員会活動を連動させることで、より強固なアスリートサポート体制を構築する。また、サポート内容等についても戦略的に発信することで波及効果を狙う。</li> </ul>	<p>【指導者】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 新たな資格制度の設計と、インテグリティ(誠実さ)教育の義務化を徹底し、地域スポーツやアスリートの未来を担う倫理観、柔軟性を持ち合わせた指導者の養成</li> <li>◆ また、国際的にも必要とされる高い専門性やマネジメント力を持ち合わせたコーチの養成。</li> </ul> <p>【審判員、ボランティア】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ WA基準と整合した審判員制度へ移行し、ボランティアとの役割分担を再設計。人手不足・高齢化に対応し、効率的で持続可能な大会運営体制を構築する。</li> </ul>	<p>【WA(国際的ポストの獲得)】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 世界陸連でのカウンシルメンバー、ガバナンス委員、コンペティション委員の継続的な活動を基盤にしつつ、次回選挙時にはアスリート委員会、コーチ委員会に日本から委員を推薦し、選出される事を目指す。</li> </ul> <p>【AA・EAA(大会招致・地域貢献)】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ AA・EAA(大会招致・地域貢献)日本陸上界の発展、世界・アジア陸上界への貢献、アスリートの活躍に繋がる要素を総合的に協議し、国際競技会の招致を進める。</li> </ul>	<p>【「RIKUJO JAPAN」を活用したムーブメント創出】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ RIKUJO JAPANの全国での活動を拡大し、企業・自治体・競技関係者とともに社会課題の解決に取り組む。</li> <li>◆ また、RIKUJO JAPANの活動の担い手となるアスリートや指導者、ボランティア等の人材プールを構築する。</li> </ul>

## <人材育成> アスリートの育成

### 第15期(2025年度)開始時の現状と課題

- > 現状:オリンピック競技大会・世界選手権で、過去に活躍できなかった種目を含む複数種目において入賞者を多数輩出しており、「2028年 世界のトップ8」(JAAF VISION 2017)が視野に入ってきた。
- > 課題:シニアに直結するU23(大学生)世代の強化が十分ではない。ネクストジェネレーション強化として、U19、U20カテゴリーの育成強化に加え、U23(大学生)世代の強化に力をいれる。
- > 目指すもの:「複数年にわたり世界で活躍できる確固たる実力をつける」ことを強化活動目標に掲げ、そのためにポイントとなる「国際競技会での自己記録達成率をいかに上げることができるか」に焦点をあてた強化計画を策定する。
- > 競技力向上と人材育成:主軸となるダイヤモンドアスリート制度(次世代アスリート強化育成プログラム)およびライフスキルトレーニングプログラムを継続的に行い、新たに導入したハイパフォーマンスリーダーズプログラムを本格稼働する。

### 第15期(2025年度)活動目標

#### 【強化】

- ◆ 東京2025世界選手権においてプレイングテーブル10位以内
- ◆ アンダーカテゴリーからシニアまでの強化体制確立

#### 【育成】

- ◆ 人材育成事業におけるプログラムの見直し、および、再編
- ◆ 事業部と連携し、育成世代に配慮した競技会システムの検討、および、構築

### 第15期(2025年度)成果と課題

#### 【強化】

- ◆ 東京2025世界選手権のプレイングテーブルは16位ではあったものの、4つの日本記録やメダル2つを含む、入賞11という成績を収めることができた。
- ◆ 日本スポーツ振興センター主催の課題解決型アスリート育成パスウェイ構築支援プログラムにU23育成プロジェクトが採択され、アンダーカテゴリーからシニアまでの強化体制を確立中

#### 【育成】

- ◆ 既存の人材育成プログラムは随時アップデートでき、また、国際競技会を活用しアジア圏を対象とした本連盟主体の人材育成事業も実施した。
- ◆ 「育成年代における競技会ガイドライン」を策定し、2025年12月の理事会において承認された。
- ◆ 「競技者育成プログラム」の完成。上記「育成年代における競技会ガイドライン」とともに、競技者育成の指針として、競技者、指導者をはじめすべての関係者への周知を進めていく。



<人材育成> アスリートの育成

第16期(2026年度)活動目標

【強化】

- ◆ アジア競技大会において選手がベストパフォーマンスを発揮できる環境の整備
- ◆ Ultimate Championshipの出場のためのダイヤモンドリーグ出場者増

【育成】

- ◆ 「育成年代における競技会ガイドライン」に準じた競技会開催に向けての整備

第16期(2026年度)末に目指す姿

【強化】

- ◆ Ultimate Championshipの出場者輩出
- ◆ アジアのナンバー1  
(愛知・名古屋2026アジア競技大会 プレイシングテーブル1位)

【育成】

- ◆ 人材育成事業の自走化
- ◆ 育成世代に配慮した競技会システムの実践
- ◆ 「競技者育成プログラム」の周知徹底

事業内容

国際競技会への派遣

- 国際競技力の向上として、「複数年にわたり世界で活躍できる確固たる実力をつける」ため、また「海外で自己記録達成率を上げる」経験値を獲得するために国際競技会への派遣を行う。
- ◆ 愛知・名古屋2026アジア競技大会を最重要競技会とし2026年度に開催される国際競技会に日本代表として計画的な派遣を行う。
  - ◆ 競技会の重要度によって派遣の有無、人数を調整を行い、効果的な派遣を行う。
  - ◆ 本連盟強化スタッフも積極的に国際競技会へ派遣することにより、環境が整備されていない海外でいかにパフォーマンスを発揮する(させる)術を学び、強化方針に反映する。

国際的なトップアスリートの重点強化

- ◆ 強化競技者(プラチナ・ゴールド・シルバーアスリート)の活動資金援助
- ◆ ダイヤモンドリーグ参加における資金補助
- ◆ 愛知・名古屋2026アジア競技大会の環境整備
- ◆ 種目別強化費 など  
⇒アスリートが国際競技会で活躍できるよう計画的に支援を行う。
- ◆ また、最重要国際競技会においては、アスリートが最大限のパフォーマンスを発揮できるよう環境整備を行う。

アンダーカテゴリーの育成

- ◆ アンダーカテゴリーからシニアに至る体系的な強化体制を構築し、競技力向上を図る。また、この世代の指導者に対して強化育成施策を共有し理解を得ることも重要であり、競技者・指導者ともに研修を実施する。
- ◆ ダイヤモンドアスリート制度をフラッグシップモデルとしつつ、ライフスキルトレーニングプログラム、ハイパフォーマンスリーダーズプログラムを通じて、競技および社会において国際的に活躍できる人材を育成する。
- ◆ シニアに直結するU23カテゴリーの強化の充実を図る。

医科学サポート体制の強化

- ◆ アンチ・ドーピング教育・啓発
- ◆ メディカルサポート
- ◆ 競技会におけるバイオメカニクス研究暑熱対策サポート など
- ◆ 3つの委員会(強化・医事・科学)が連動したプロジェクトの実施  
⇒強化施策に則り、陸上競技および競技者を支えていくため、また、アントラージュに対して有益な情報発信ができるよう医科学が連携したプロジェクトを実施する。また、その情報をより多くの人に伝えるための発信方法を確立する。

## <人材育成> 指導者の養成

### 第15期(2025年度)開始時の現状と課題

#### <<現状>>

- 指導者養成指針策定(2020年)以降、すべての指導者がコーチ資格を持って活動にあたる環境を目指し、JAAFエデュケーター(コーチ養成者)の養成、JAAF公認スタートコーチの新設など制度整備を行ってきた。JAAFエデュケーターは38都道府県に配置(2025年3月)され、今後、各地域における活発な指導者養成の推進に期待がかかる。
- また、有資格指導者数は7,185人(2024年10月時点)となり、2027年に17,000人を目指す養成計画のもと増加している。

#### <<課題>>

- 計画達成に向け大学との連携や市民ランナーの指導者を対象としたランニングコーチ資格の新設
- 社会や指導者にとって信頼性が高く、わかりやすい資格制度への整備
- 資格取得後も時代に沿った情報や指導スキルを持ち合わせている質の高いコーチが活動する環境づくり
- 運動部活動の地域移行(地域展開)が進むなか、すべての活動が安心安全であることを前提として行われるために有資格指導者の拡充(コーチ資格の標準化)
- 認定されたエデュケーターが各地域や都道府県において、効果的に活動・活躍するための、スキルや情報をアップデートする機会の提供
- 各地域で活動するコーチ・指導者に向けた情報提供や学びの機会づくり

### 第15期(2025年度)活動目標

- ◆ 資格取得の機会(大学との連携)確保やランニングコーチの新設
- ◆ 各コーチ資格のカリキュラム整理と資格更新条件の改変
- ◆ 中学生以下が所属する一般団体における有資格者の充足率90%到達
- ◆ コーチ資格保有者 9,000人到達
- ◆ JAAFエデュケーターを47都道府県すべてに配置
- ◆ オンライン(オンデマンド)講習の積極的活用

### 第15期(2025年度)成果と課題

#### <<成果>>

- ◆ 有資格者は、8,272人(2025年10月1日時点)となり、継続的な拡充が図れた。
- ◆ JAAFエデュケーターが46都道府県で配置され、全国的な体制が整った。
- ◆ 新たな資格取得の機会確保として、JSPOとの調整により大学での取得機会創出に向けて筋道を立てた。
- ◆ 継続的な学習環境の確保・拡充として、オンデマンドを活用した「コーチングクリニック+」を開催し、新たな受講機会を作った。
- ◆ 資格名称を刷新し、受講年齢の緩和や公募制の導入を取り入れることで、若手が早期にキャリア形成を図れる制度へと変革した。  
※2026年度より随時施行

#### <<課題>>

- ◆ 大学での資格取得機会の創出とランニングコーチ新設に向けたカリキュラム検討
- ◆ JSPO側の条件設定の延期に伴い見送った資格更新条件の変更
- ◆ コーチ養成計画の再定義(登録団体に充足させる視点へ変更したロードマップ)
- ◆ 受講から登録完了までの歩留まり改善(共通科目の受講漏れ防止等への対応)
- ◆ 講習会において地域差が出ないようJAAFエデュケーターの知識・スキルのアップデートの機会提供

## <人材育成> 指導者の養成

### 第16期(2026年度)活動目標

- 【倫理観と専門性を備えた質の高いコーチ(有資格者)が増え続ける仕組みの構築】
  - ◆ インテグリティ教育を含む養成プログラムと資格更新条件の見直し
  - ◆ すべての登録団体において適正な有資格者を配置するためのロードマップの作成
  - ◆ 新たな資格取得機会として大学連携及びランニングコーチ養成の具現化
- 【エドゥケーターが活躍し、コーチを増し続けるシステムの確立】
  - ◆ 地域主導の継続的な講習会開催による有資格者10,000人の到達
  - ◆ 良い人材を幅広く迎え入れる新たな資格取得ルートの創出
- 【コーチが自発的・継続的に研鑽を積む「学びの循環」を生む環境の創出】
  - ◆ アジア大会等を起点とし、国内外の最新知見を提供する機会の創出
  - ◆ 時間や場所にとらわれない柔軟な学習環境の提案・提供

### 第16期(2026年度)末に目指す姿

- 陸上のコーチが高い倫理観を持ち、アスリートを心身ともにささえる。社会から信頼され、頼られる存在となる。そのための基盤が整っている。
- ◆ すべての登録団体に向けて、団体規模や活動に応じた適正な有資格者の配置基準が設定され、標準化に向けた道筋が明確に示されている。
    - ・ 良質な有資格者の拡充と、中学生以下が所属する団体に向けた有資格者の配置が進むことで、部活動改革(部活動地域展開を含む)、および地域クラブをはじめとする地域活動を支援している。
  - ◆ 多様な人材を受け入れられる体制が整い、有資格者が継続的に増える仕組みが確立している。
    - ・ 新たな資格取得ルートが具現化され、エドゥケーターの活躍とともに新たな担い手が地域へ持続的に拡充していく基盤が完成している。
  - ◆ コーチ自身の自発的な学びを支援し、「学びの循環」が生まれている。
    - ・ 豊富な学習機会の提供によってコーチの研鑽意欲が高まり、継続的な学びと、質の高い指導者であり続ける環境がつけられている。

### 事業内容

指導者養成制度の整備	コーチ資格取得の機会提供	研鑽のための機会提供
資格の価値を高める制度設計を行うとともに、多様な人材を迎え入れる新たな養成ルートを確立する。 【ロードマップの作成】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 有資格者の拡充に関する年次計画を示す</li> </ul> 【登録団体の認定評価基準の設定】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 有資格者の配置人数や資格の種類等の設定</li> </ul> 【更新条件の見直し】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ インテグリティ教育の義務化、その他条件のリニューアル</li> </ul> 【大学での養成校の設定(新たな養成ルート)】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 認定基準策定と養成校(20校程度)の募集</li> </ul> 【ランニングコーチの新設】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 認定基準策定およびパイロットコースの実施</li> </ul>	既存の養成体制を強化し、講習会の質を高めるとともに講習修了者に向けてJSPOスポーツ指導者としての登録促進を強化することにより、有資格者の着実な充足を図る。 【資格講習会の継続開催】 ※数字は目標値 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 公認A級コーチ(旧 公認コーチ):120人(3会場)</li> <li>◆ 公認B級コーチ(旧 公認ジュニアコーチ):800人(40会場)</li> <li>◆ 公認C級コーチ(旧 公認スタートコーチ):900人(60会場)</li> </ul> 【JAAF-START等を活用した資格登録の促進】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 資格の未登録(講習を修了したが有資格者として、JSPOスポーツ指導者登録が完了していない)者にむけた登録促進</li> <li>◆ 公認B級コーチ受講者の「JSPO共通科目Ⅰ」受講、修了の徹底。</li> </ul>	最新知見の提供と学びの環境整備により、指導の質の向上と資格失効の防止を両立させる。 【JAAFエドゥケーター研修会の実施】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 全国で指導・評価基準を統一するためのアップデート研修。</li> <li>◆ 新規養成を行い養成者(講師)を拡充する。</li> </ul> 【アジアコーチカンファレンスの開催】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ アジア大会と連動した最新知見・情報を取得できる機会。</li> </ul> 【ニーズに応じた学習機会提供】 <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 最新情報を双方向で学べるコーチングクリニックや女性指導者を対象としたクリニックの開催。</li> <li>◆ 時間や場所に制限を受けない「コーチングクリニック+」等の拡充。</li> </ul>

## <人材育成> ささえる人材の養成(審判員の養成・ボランティアの活躍)

### 第15期(2025年度)開始時の現状と課題

- ウェルネス陸上の実現のためには、全国で開催されている約4,800の公認競技会を今後も継続して開催していくことが重要になる。
- しかしながら部活動の地域移行、審判員の高齢化、少子化などで競技会運営の担い手が不足することが懸念されている。
- 現状は競技会の開催に必要な人員について、明確になっていない。
- 競技会の開催に必要な人員の条件を再定義することで、現在の公認競技会開催数を維持していくために必要な審判員数の検討、競技会運営の省力化を検討する。
- WAが近年審判員資格の改訂をおこない、新制度での養成も開始された。国内資格との制度の乖離もでてきている。
- スポーツ団体ガバナンスコードにおいて、審判員のコンプライアンス教育を求められるようになってきた。
- かつてはWAにおける、競技規則の改訂は年1回まとめておこなわれてきたが、昨今では時期に関係なく、必要に応じて変更し、即時適用するようになっている。国内においても臨機応変に国内でのルールへの対応検討が求められる。
- 審判員の不足が懸念される中、競技会運営を維持していくためには、従来とは異なる「ささえる人」の活用が必要になってくる。ボランティアの活用を模索する必要が出てきている。

### 第15期(2025年度)活動目標

- ◆ 競技会の規模・条件に応じた審判員編成の適正化・標準化、WA資格との連携に向けた課題と対応策を整理
- ◆ 競技会運営の省力化検討
- ◆ 日本選手権、GGPでボランティアの活躍の場の促進を進める仕組みの検討

### 第15期(2025年度)成果と課題

- ◆ 競技会の規模・条件に応じた審判員編成について、現状整理と課題の洗い出しを実施。
- ◆ 審判員とボランティアの役割を検証し、審判が必要な部署が明確となった。
- ◆ WA資格との関係性や今後の制度整理に向けた論点を明確化した。
- ◆ 競技会運営における省力化について、対象業務の整理および改善の方向性を検討。
- ◆ 日本選手権・セイコーゴールデングランプリおよび主催競技会において、多くのボランティアの活躍の場を整えた。2022年度から取組を開始し、これまでに延べ2,000名近くから参加希望が寄せられている。



## <人材育成> ささえる人材の養成(審判員の養成・ボランティアの活躍)

### 第16期(2026年度)活動目標

- ◆ 公認審判員制度の改定に向けた具体設計を行い、WA資格との整理を含めた新たな制度案を策定する。
- ◆ 競技会運営の省力化について、実証的な取組を進め、一部競技会において新たな運営モデルの導入を図る。
- ◆ 主催競技会を中心に、ボランティア人材の登録・活躍に向けた仕組みづくりを具体化し、将来的な「陸上ボランティア登録」構築の基盤を作る。

### 第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ 公認審判員制度について、WA資格との関係整理を含めた新制度案を取りまとめ、導入に向けた具体的な制度設計が整っている。
- ◆ 競技会運営の省力化に向けた実証的な取組を通じて、新たな競技会運営モデルの有効性を確認し、主催競技会を中心に導入が進んでいる。
- ◆ 主催競技会においてボランティア人材の登録・活躍の仕組みが具体化し、将来的な「陸上ボランティア登録」制度の構築に向けた基盤が整っている。

### 事業内容

#### 審判員の養成

##### 【競技会運営の省力化と審判員の活用、制度の設計】

- ◆ 制度設計
  - ・ 公認審判員制度の改定に向け、現行制度の課題整理およびWA資格制度との関係整理を行い、新たな公認審判員制度の具体設計を進める。
- ◆ 運営モデル
  - ・ 公認競技会の規模や競技特性に応じた審判員配置の適正化・標準化を検討し、競技会運営の効率化・省力化に向けた運営モデルの設計を進める。
- ◆ 実証導入
  - ・ 審判員の負担軽減と持続可能な競技会運営体制の構築を目指し、一部の主催競技会において新たな運営モデルの実証的導入を行う。

##### 【公認審判員の技能の向上】

- ◆ ルール理解
  - ・ WA競技規則の改訂に関する情報収集を行い、日本語競技規則への反映と加盟団体への迅速な周知を図る。
- ◆ 審判技能
  - ・ 国内外の審判事例や競技運営事例を収集・共有し、全国競技運営責任者会議等を通じて審判員の技能向上および競技運営の質の向上を図る。
- ◆ コンプライアンス
  - ・ 公認審判員へのコンプライアンス教育を継続的に実施し、競技会運営における公正性および透明性の確保を推進する。

##### 【国際的に活躍できる審判員の養成】

- ◆ WA審判資格制度との連携を図り、Bronze資格取得者の拡充を進めるとともに、Silver・Gold資格取得を見据えた段階的な人材育成を推進する。2026年度目標Bronze有資格者:約300名 → 約500名

#### ボランティアの活躍

- ◆ 主催競技会を中心に、競技会運営を支えるボランティア人材の登録・活躍に向けた仕組みづくりを進める。
- ◆ 将来的な「ボランティア登録制度」の構築を見据え、募集・登録・配置・育成の仕組みを整理し、試行的な運用を通じて制度設計を具体化する。

第16期(2026年度)活動目標

- ◆ 陸上界の発展とアスリートに繋がる国際戦略の策定と推進
- ◆ グローバル組織(WAやAA等)でのプレゼンスの向上と貢献に繋がるキャパシティビルディング(人材育成)
- ◆ ポスト獲得に向けた戦略的なロビー活動
- ◆ 陸上の価値向上に資する国際競技会の戦略的な誘致
- ◆ 国際社会貢献に繋がる関係団体との連携の強化

第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ 明確な短中期・中長期国際戦略とロードマップ
- ◆ 現WA(世界陸連)・AA(アジア陸連)・EAAA(東アジア陸連)での役員、委員の活躍と貢献
- ◆ 2027年選挙に向けた万全の体制
- ◆ アジア・東アジアの大会の誘致、開催
- ◆ 国際社会貢献活動の推進
- ◆ 国際貢献活動のための財政基盤の強化

事業内容

国際戦略の策定と推進

- ◆ 国際競技団体の任期サイクルに整合した短中期(～2027年)、中長期(～2031年)の国際戦略を策定し、重点領域を明確化した上で計画的に実行。それぞれの戦略に基づいたロードマップの推進。
- ◆ 東京2025世界陸上の有形・無形レガシーの活用。
- ◆ 戦略の目的と優先順位を定め、他部署と連携した上で効果的な推進。
- ◆ アスリートの競技力向上に繋がる国際基準、ルールの正確な把握と浸透を徹底。
- ◆ 競技大会誘致を初めとする国際貢献活動の財源確保(マーケティング戦略との連携)。
- ◆ JICA等公的な国際協力機関との連携強化。

キャパシティビルディング  
(人材育成)

- ◆ WA・AA・EAAAにおける日本人役員、委員が活躍出来る環境の整備、支援。
- ◆ 経験者からの知見の共有、人脈・ネットワークを体系化し、若手、次世代人材へ継承。
- ◆ 指導者、審判、スタッフが国際基準を理解し、経験をつめる場面を国内外の関係機関と連携して整備。
- ◆ 日本で開催される国際競技会に合わせ国際レベルの専門家を招聘し、国際基準の進行・イベントプレゼンテーションを学び、魅力的な大会開催に繋げる。
- ◆ 国際大会や国際競技団体への積極的な事務局員派遣。

ポスト獲得

- ◆ 2027年のWA、AA、EAAAの選挙を見据えて、適切なガバナンスのもとで、戦略的な候補者選定と支援を構築し、国際ポスト獲得を確実に進める。
- ◆ 世界陸連では既存のカウンシルメンバー、ガバナンス委員、コンペティション委員の継続的な活動を基盤にしつつ、次回選挙時にはアスリート委員会、コーチ委員会に日本から委員を推薦し、選出される事を目指す。
- ◆ 選挙ガイドラインに従って、効率的なキャンペーン活動を実施。必要に応じて外部アドバイスも得てポスト獲得に向けて準備。
- ◆ 日本からの国際リーダーの育成、輩出を強化。

国際競技会の誘致

- ◆ 日本陸上界の発展、世界・アジア陸上界への貢献、アスリートの活躍に繋がる要素を総合的に協議し、国際競技会の誘致を決定。
- ◆ アジア選手権能美競歩の継続開催。
- ◆ アジアクロスカントリー選手権の福岡での次回大会(2028年)の継続開催を検討。
- ◆ 東アジアハーフマラソン選手権の開催について協議。
- ◆ 東アジアのハーフマラソン、アジアの競歩、クロスカントリーを優先的な誘致対象とし、将来的にはより高位のアジア選手権、室内、世界競歩チーム選手権等も検討。
- ◆ 競技会に合わせてコーチや審判の技術向上のためのセミナーを実施し、アジア地域の競技レベル向上の中核的役割の遂行、国際競技会開催の意義を高める。

<組織基盤強化>

第15期(2025年度)開始時の現状と課題

- ハラスメント違反や暴力行為の根絶は道半ばであり、昨今はアスリートに対する誹謗中傷や盗撮行為も大きな社会問題となっている。陸上界におけるインテグリティを高めるには、本連盟での体制強化やコンプライアンス研修を始めとする教育・啓発活動に留まらず、加盟団体・協力団体等の関係団体を含めた取組みが不可欠である。
- 本連盟に発生するあらゆるリスクについて、総合型リスク管理の考え方のもとにリスク管理体制整備計画を立て、まずは諸規程の制定に取り組んでいる。
- 社会情勢の影響も受け、多くの主催競技会は赤字構造から脱却出来ないでいる。中央競技団体としての役割責任を果たしつつ活動の基盤を強化し、中長期的な視点でスピード感を持って事業を展開し、陸上の発展に貢献していかなければならない。「選択と集中」で、戦略的に経営資源を投入していくことが求められている。

第15期(2025年度)活動目標

- ◆ スポーツ・インテグリティ研修の全国的な展開。
- ◆ Well-being セミナーの参加者を広く求めるとともに、セミナー開催数の増加。
- ◆ 種々のリスクを当事者として意識する組織づくりと収益の向上を図るための具体的な施策の検討。

第15期(2025年度)成果と課題

- ◆ 対話型新人事制度を導入をし、事務局体制の強化を推進している。
- ◆ 理事会や常務理事意見交換会の頻度を高め、組織運営の機動性を確保。
- ◆ 倫理委員会を定例開催し、ハラスメント・暴力行為等相談窓口に対応。
- ◆ アスリート保護のため、誹謗中傷対策としてSNSモニタリングと、迷惑撮影対策として会場ルールの強化・巡回を実施。
- ◆ RIKUJO JAPANと連携し共創型の協賛カテゴリを設定。



第16期(2026年度)活動目標

- ◆ 組織運営の迅速化および実行性の高い意思決定体制の確保。
- ◆ 加盟団体との連携を推進し、ガバナンス体制の強化。
- ◆ 組織全体のリスクを体系的に把握・管理し、安定的で持続可能な事業運営を実現。
- ◆ 事業の効率的な推進と価値の最大化。

第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ 陸上の価値を高める信頼性の高い組織の確立。
- ◆ ガバナンス強化と収入源の拡充による事業活動の安定化。
- ◆ 陸上界全体におけるインテグリティの向上。

事業内容

信頼と多様性を支えるガバナンス強化

- 【適正な組織運営と加盟団体との連携の推進】
- ◆ 評議員会および理事会の規模の最適化。
  - ◆ 加盟団体連絡協議会の開催により地方組織との緊密な意見交換、および加盟団体のガバナンス強化に向けた財務委員会を主軸としたサポート体制の実施。
- 【財務基盤および法務サポートの強化】
- ◆ 持続的運営を可能にする経常収益と費用の最適なポートフォリオの検討。
  - ◆ 運営や事業に付随する法的リスクへ日常的に即応できる体制の強化。
- 【総合型リスク管理経営の構築】
- ◆ 内部監査体制の構築による諸規程の適切な運用とチェックの徹底。
  - ◆ 各種規程の整備に加え役員等への浸透・定着による意識改革の完遂。
- 【事務局体制の整備】
- ◆ 対話を重視した新人事制度を本格的に運用。
  - ◆ 事務局内の情報管理の徹底や効率的な意思決定を実現する組織整備。

インテグリティの向上

- 【アスリートを守るための誹謗中傷・迷惑撮影対策】
- ◆ JOCと連携したSNSモニタリングおよび対応。
  - ◆ 競技会場での撮影ルール巡回強化による迷惑撮影への断固たる対応。
  - ◆ アスリート委員会と連携して、誹謗中傷や盗撮の防止に向けた広報・啓発活動の実施。
- 【暴力・ハラスメントの根絶と啓発活動】
- ◆ 倫理委員会による通報案件への迅速かつ厳正な審議と対応の実施。
  - ◆ 通報事例を基にした指導者向け啓発活動の実施。

社会価値創出によるマーケティング改革

- ◆ RIKUJO JAPANを軸に企業の社会課題解決と陸上の価値を結びつけた「Social Innovation Family」を創設。
- ◆ SDGs等の社会課題をテーマとした新たなパートナーシップの拡大。
- ◆ 事業戦略を強化するため、専門的な知識や経験を持つ外部人材の登用。

## <ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)の推進>

### 第15期(2025年度)開始時の現状と課題

- 「人の多様性を認め、受け入れて活かすこと」を意味するダイバーシティ&インクルージョン(D&I)を重視し、様々な場面での推進に取り組んでいる。陸上界を持続的に発展させていくために、施策のすべてにおいて「人権の尊重と保護」、「ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)」を大切にする。

### 第15期(2025年度)活動目標

- ◆ WA制作セーフゲーディングに係るeラーニングの受講対象者をアスリートやコーチ資格保有者に拡大。

### 第15期(2025年度)成果と課題

- ◆ 評議員・役員向けWA制作eラーニング受講促進と、コンプライアンス研修を実施し、組織内におけるコンプライアンスを強化。
- ◆ 陸上界の「JAAF人権ポリシー」と「JAAFインテグリティ行動指針」を制定。
- ◆ D&I高校生ワークショップを開催。高校生考案の新種目を創立100周年イベントで採用し、D&Iの実践例を創出。
- ◆ セーフゲーディング意識の浸透やインクルーシブな組織文化の定着に向けた継続的な取組が課題。
- ◆ WA規則の女子SRV遺伝子検査導入に対し、日本代表選手の検査サポートと人権的課題への継続的な取組。

### 第16期(2026年度)活動目標

- ◆ 陸上界におけるセーフゲーディングの理解と意識を浸透し、安全・安心な環境を実現。
- ◆ 推進研修を展開し、D&Iに対する関係者一人ひとりの知識および認識の向上。
- ◆ 虐待・ハラスメント・搾取等のリスクから弱い立場にある人を守るための制度・体制の整備の推進。
- ◆ ワークショップ等を通じて多様な価値観を認め合い、誰もが楽しめる競技会の創出に取り組むとともに、あらゆる人々が陸上に参加しやすい環境づくり。

### 第16期(2026年度)末に目指す姿

- ◆ インクルーシブな組織文化が醸成された陸上界のモデルケースとして、競技力そのものを競うのではなく、個々人の価値観に応じた評価を設ける楽しむ競技会の開催。

### 事業内容

#### 【セーフゲーディングの実践と体制構築】

- ◆ WA制作eラーニング受講の全関係者への促進と履修・進捗管理。
- ◆ コンプライアンス研修の実施による組織全体のインテグリティの推進。
- ◆ 専門知識を持つセーフゲーディングオフィサーの育成。

#### 【人権尊重とD&Iの推進】

- ◆ 個人の尊厳を尊重する具体的事例を用いたワークショップの開催。
- ◆ セーフゲーディング・ポリシー策定に向けた基礎知識習得と人権意識向上のための研修の実施。
- ◆ 人権ポリシーおよびインテグリティ行動指針の周知。
- ◆ 女子選手のSRV遺伝子検査に関するサポート。
- ◆ インクルーシブな組織文化醸成を目指した高校生ワークショップの開催。

# <サステナブルな社会への貢献－SDGs>

## 第15期(2025年度)開始時の現状と課題

- 2015年、国連総会で採択された「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:SDGs)」には、17の目標が掲げられている。本連盟では、「JAAF REFORM－中長期計画－」の中で、SDGsの達成に向けて“陸上の力”を活用しながら貢献していくことを明確に示している。2022年7月より、陸上を通じてSDGsをはじめとする社会課題について考え、行動するプロジェクトをスタートし、このプロジェクト「#LETSTHINK\_（レッツシンク）」と名付けた。陸上界で生まれた気づきや取組を集めて互いに共有・活用し合いながら、それぞれの“ライフステージ”や“未来の社会”をより良くしていくことを目指す。
- 陸上界におけるアスリートの健康問題に向き合い、課題解決を進めることにより、アスリートが現在も、そして未来もウェルビーイング(健康)な状態となり、生涯を通じ、それぞれのライフステージで陸上を楽しむことを目指す「Well-being Athletes & Human Program(WEAP)」を立ち上げた。陸上に関わるすべての人が「スポーツを通じて心も体も満たされたウェルビーイング(Well-being)な状態」であり続けるためには、発育発達期にあるアスリートの健康を守ることが大切である。

## 第15期(2025年度)活動目標

- JAAFサステナビリティプランの作成。策定にあたっては国内外の先進事例を参考にしながら指標を設定し、関係団体と共有するとともに、公式WEBサイト等を通じて情報発信。
- Well-being セミナーの参加者を広く求めるとともに、セミナー開催数の増加。

## 第15期(2025年度)成果と課題

- JAAFサステナビリティプランの作成には至らなかった。
- 「3Rのバトン」実施、環境配慮素材の利用、食品ロス削減とGHG排出量の算定により環境サステナビリティの推進。
- 海外アスリートの学校訪問、「キッズデカスロン」、パートナー協働の体験型イベント(エコボッチャ等)を通じた子どもの健やかな心身育成と多文化共生の推進。
- 日本代表派遣時の選手村や宿泊などで使用した調理器具の「子ども食堂」への寄贈による社会貢献。
- 全国中高駅伝での鉄剤注射調査・研修を通じて、若年期競技者の健康保持を推進。
- 広島テレビと協定を締結し、広島テレビのイベントで指導者・育成年代へWell-being理念の情報を発信。
- 現状の研修・イベントでは対象者が限定的なため、Well-being理念の浸透に向けた持続可能な仕組みの構築が課題。

## 第16期(2026年度)活動目標

- SDGsプロジェクト「#LETSTHINK\_」のもと、陸上に関わりながら、身近にできることから行動できる環境の創出と意識づけ。
- Well-beingの理念を全国に共有し、地域が自走できる教育コンテンツと研修パッケージを整備。競技力と健康を両立する持続可能な育成環境の浸透を目指す。

## 第16期(2026年度)末に目指す姿

- 陸上の力を活かして社会や地球が抱える課題に取組み、SDGs(持続可能な開発目標)の達成。
- Well-beingを基盤に、中央と加盟・協力団体が連携し、健康とスポーツの価値を守り広げる取組が全国で継続的に展開されている。

## 事業内容

### 「#LETSTHINK\_」の推進

- 優れた活動を表彰する「BEST THINK賞」の実施と、公式WEBサイトでの好事例の情報共有。
- 外部団体と連携した活動の推進。

### 資源循環と環境負荷の低減

- 不要になったスポーツウェア等を回収・再利用する「3Rのバトンプロジェクト」。
- 「環境配慮型アスリートビブス」の導入。
- 環境配慮型素材を用いた会場案内サインの設置。
- 競技会での食品ロス削減。
- 温室効果ガス(GHG)排出量算定と、削減対策の推進。

### 多文化共生と次世代教育

- 海外トップアスリートと小学生の交流を通じた、国際理解と多文化共生の推進。
- 「キッズデカスロンチャレンジ」等を通じた、子どもの健やかな心身育成とスポーツ機会の提供。
- パートナー企業と協働した、サステナビリティ備品による体験型イベント(エコボッチャ等)の実施。
- Well-beingの理念の普及を目的としたイベント研修会実施・教育ツールの作成。

### 持続可能な競技会運営と将来像

- 再生可能エネルギーの活用や暑熱対策の徹底による、気候変動への対応。
- 競技会役員・審判員・補助員の活動環境改善(交代制、省力化機器の活用等)。
- パラスポーツ団体との連携強化による多様性の尊重。
- 会場のバリアフリー化や案内表示の改善による、誰もが利用しやすい環境づくり。

公益財団法人日本陸上競技連盟 第16期 収支予算書

(2026年4月1日から2027年3月31日まで)

(単位：円)

科目	第15期	第16期	増減
<b>(1) 経常収益</b>			
1. 基本財産運用収益	8,587,000	8,587,000	0
2. 登録料受入収益	255,000,000	260,000,000	5,000,000
3. 加盟金受入収益	4,700,000	4,700,000	0
4. 受取寄付金	10,000,000	11,500,000	1,500,000
5. 受取委託金・助成金	249,353,000	220,826,000	△28,527,000
6. 事業収益	1,353,886,686	1,612,755,000	258,868,314
経常収益計	<b>1,881,526,686</b>	<b>2,118,368,000</b>	236,841,314
<b>(2) 経常費用</b>			
9. 事業費	1,735,569,578	1,677,963,000	△57,606,578
10. 管理費	145,957,108	481,197,000	335,239,892
経常費用計	<b>1,881,526,686</b>	<b>2,159,160,000</b>	277,633,314
当期経常増減額	<b>0</b>	<b>-40,792,000</b>	△40,792,000

公益財団法人日本陸上競技連盟 第16期 科目別収支予算

(2026年4月1日から2027年3月31日まで)

(単位：円)

科目	公益目的事業会計	法人会計	内部取引控除	合計
I 一般正味財産増減の部				
1. 経常増減の部				
(1) 経常収益				
基本財産運用収益	4,293,500	4,293,500	0	8,587,000
登録料受入収益	260,000,000	0	0	260,000,000
加盟金受入収益	4,700,000	0	0	4,700,000
受取寄付	11,500,000	0	0	11,500,000
受取委託金・助成金	220,826,000	0	0	220,826,000
事業収益	1,463,644,621	149,110,379	0	1,612,755,000
受取協賛金	1,004,456,621	149,110,379	0	1,153,567,000
広告料収益	209,000	0	0	209,000
参加料収益	62,689,000	0	0	62,689,000
入場料収益	129,998,000	0	0	129,998,000
プログラム売上収益	0	0	0	0
放送権料収益	45,000,000	0	0	45,000,000
受取助成金	64,862,000	0	0	64,862,000
販賦収益	7,000,000	0	0	7,000,000
加盟料収益	96,000,000	0	0	96,000,000
その他の事業収益	21,810,000	0	0	21,810,000
器具検定料収益	5,500,000	0	0	5,500,000
競技場公認料収益	18,000,000	0	0	18,000,000
後援名義使用料収益	4,320,000	0	0	4,320,000
印税収益	1,000,000	0	0	1,000,000
販売手数料収益	400,000	0	0	400,000
受取利息	2,400,000	0	0	2,400,000
雑収益	0	0	0	0
経常収益計	1,964,964,121	153,403,879	0	2,118,368,000
経常外収益	40,792,000			40,792,000
計	2,005,756,121	153,403,879	0	2,159,160,000
(2) 経常費用				
事業費	2,005,756,121	0	0	2,005,756,121
役員報酬	0		0	0
給与・手当	175,742,600		0	175,742,600
賞与	58,444,800		0	58,444,800
賞与引当金繰入額	0		0	0
退職給付引当金繰入額	18,264,000		0	18,264,000
法定福利費	37,235,730		0	37,235,730
福利厚生費	0		0	0
減価償却費	0		0	0
水道光熱費	1,315,008		0	1,315,008
旅費交通費(国内)	413,576,000		0	413,576,000
旅費交通費(国際)	145,995,000		0	145,995,000
諸謝金(国内)	26,113,000		0	26,113,000
諸謝金(国際)	3,020,000		0	3,020,000
通信費	11,315,000		0	11,315,000
荷造配達費	4,434,000		0	4,434,000
印刷製本費	21,299,000		0	21,299,000
賃借料	93,991,982		0	93,991,982
損害保険料	7,248,000		0	7,248,000
会議費	996,000		0	996,000
交際費	2,655,000		0	2,655,000
支払手数料	2,853,000		0	2,853,000
業務委託料	516,841,000		0	516,841,000
備品消費	58,124,000		0	58,124,000
新聞図書費	6,000		0	6,000
租税公課	300,000		0	300,000
補助金(中学, 高校, 大学)	727,000		0	727,000
地域支援金	29,800,000		0	29,800,000
強化費	102,147,000		0	102,147,000
会場設営・警備費	210,780,000		0	210,780,000
主管料	15,999,000		0	15,999,000
広告宣伝費	15,168,000		0	15,168,000
競技会費用負担金	26,299,000		0	26,299,000
仕入商品代	250,000		0	2,500,000
助成金委託費	0		0	0
諸会費	0		0	0
雑費(国内)	2,342,000		0	2,342,000
雑費(国際)	225,000		0	225,000

公益財団法人日本陸上競技連盟 第16期 科目別収支予算  
(2026年4月1日から2027年3月31日まで)

(単位：円)

科 目	公益目的事業会計	法人会計	内部取引控除	合 計
<b>管理費</b>	0	153,403,879	0	153,403,879
役員報酬		33,390,000	0	33,390,000
給与・手当		16,704,400	0	16,704,400
賞与		5,555,200	0	5,555,200
賞与引当金繰入額		0	0	0
退職給付引当金繰入額		1,736,000	0	1,736,000
法定福利費		3,539,270	0	3,539,270
福利厚生費		1,728,000	0	1,728,000
減価償却費		7,000,000	0	7,000,000
水道光熱費		124,992	0	124,992
旅費交通費(国内)		9,827,000	0	9,827,000
旅費交通費(国際)		0	0	0
諸謝金(国内)		1,260,000	0	1,260,000
諸謝金(国際)		0	0	0
通信費		8,000,000	0	8,000,000
荷造配達費		2,500,000	0	2,500,000
印刷製本費		240,000	0	240,000
賃借料		5,955,018	0	5,955,018
損害保険料		980,000	0	980,000
会議費		850,000	0	850,000
交際費		700,000	0	700,000
支払手数料		20,335,000	0	20,335,000
業務委託料		5,899,000	0	5,899,000
備用品費		2,850,000	0	2,850,000
新聞図書費		70,000	0	70,000
租税公課		5,050,000	0	5,050,000
教育研修費		2,000,000	0	2,000,000
加盟料		550,000	0	550,000
諸会費		150,000	0	150,000
雑費(国内)		16,410,000	0	16,410,000
雑費(国際)		0	0	0
<b>経常費用計</b>	<b>2,005,756,121</b>	<b>153,403,879</b>	<b>0</b>	<b>2,159,160,000</b>
評価損益等調整前当期経常増減額	0	0	0	0
基本財産評価損益等	0	0	0	
特定資産評価損益等	0	0	0	
投資有価証券評価損益等	0	0	0	
評価損益等計	0	0	0	
<b>当期経常増減額</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	